第３章

研修レポート

どちらが地球の裏側なのですか？

栃木県立宇都宮清陵高等学校
教諭（社会）　半澤典子（パラグァイ班）

1. はじめに

28時間余りの空の旅から解放されて、アスンシオン国際空港に到着した。パラグァイは「地球の裏側」であり、季節は冬と聞いていたので、それなりの準備をしていったわけだが、出発1週間前の現地情報とは裏腹に、道行く人の多くが薄着ファッションで、日本の夏の陽気と少しも変わらず、「今、地球の裏側に来たのだ」と自分に言い聞かせてみても納得ゆかぬ気候だった。後日わかったことであるが、このパラグァイも30年ぶりの暖冬であったとのこと。このようなわけで、分厚いセーターは道中の重荷と化したのであった。

一般に、「裏側」という言葉のイメージから、そこでは何事もすべて表側と「反対」であるかのようにように思い込んでしまうことがある。そのため、現実を直視することを軽んじ、現実に直面したとき、そのギャップに戸惑う。今回のこの小さな出来事の中にもそのような思い込みがあったことを研修のスタート時点から思い知らされた。

さて、ある歓迎会でのことである。「やっと地球の裏側のパラグァイにやって来ました」と言ったとたん、「なぜパラグァイが地球の裏側なのですか？」と、すかさず質問されてしまった。一瞬、何かが胸に突き刺さったようなショックを覚えた。確かに「裏側」という言葉に潜んでいるイメージは暗くて重い。ましてや「地球の裏側」となっては、太陽の当たらない世界そのもののような錯覚に陥っても致し方ない。その時私は、無造作に発する言葉がどれほど相手の心を傷つけているかなど推測することもなく話をしていたことに気付いたのであった。

途上国パラグァイに生活している人々にとっては、パラグァイこそが「地球の中心」なのであり、また、「生活の場」そのものなのである。豊かな大自然に抱かれた彼らは、自然の恵みを受けてゆったりと生活しており、その情景は研修前に私が頭に描いていた「途上国」というイメージからは、およそかけ離れたものであった。確かに11日間余りの研修中に大規模な工場群など一度も目にしなかったが、ゆったりとした生活の臭いはそこここに漂っていたし、早朝のアスンシオンの街中を走る満員バス

やアルゼンチンのポサーダスに働きに行くパラグァイ人で混雑していたエンカルナシオンの河港、そして国境を越えて働きに来るブラジル人たちの忙しそうに移動する姿が見られたシウダ・デル・エステの街の喧騒などからは、「途上国」の実感は全く湧かなかった。このような光景から考えるに、時差が13時間もある日本こそが、パラグァイ人からすれば「地球の裏側」にあたるのであり、遠い存在であっても不思議ではないと思われた。このように、日本とパラグァイは地球上のほぼ対蹠点に位置しているが、それぞれの生活観に変わりはないことが認識できたので、以後、私はパラグァイを「地球の裏側」の国とは言わず、「地球の反対側」の国と表現するように心がけたのであった。

このことを通して、日本がパラグァイを「地球の裏側」と表現するとき、その言葉の微妙なニュアンスの中に、「表」と「裏」＝「先進国」と「途上国」＝「北」と「南」といった経済的格差をイメージする何かが働いてはいないだろうか。そしてさらに、そのイメージでもって地球の反対側の地域を見つめてはいないだろうか。また、見つめようとするエゴイスティックな考え方が存在しないだろうか。換言すれば、南北問題のもう一つの表現方法となってはいないだろうか、との疑問をつのらせていた。私はこれらのことを疑問に思いつつも、この日本とパラグァイとの関係の中にODA（政府開発援助）の基本理念を見いだしたように思った。

すなわち、地球は「回転楕円体」というほぼ球形をしており、表も裏もない。表とか裏とかという表現は、平面的発想であり、そこからは対立の構図しか生まれない。ところが、球形からは立体的発想が可能であるから、「共に生きる輪」をイメージアップすることができる。共に生きるための相互協力・援助の精神は、常に存在すべきものであり、その活動は、「与える」・「教える」のような一方的な援助や協力ではなく、相手国の要請に応じて不足しているものを互いに補填し合う、また、力不足の時には、自助努力のための協力・援助を惜しまないなど、ODAの要請主義尊重精神に合致した必要不可欠のものと捉えるべきではないかと考えたのである。私は、パラグァイにおける日本のODAの実情を視察し、さまざまな分野で日本人がパラグァイ社会に貢献している状況を知り、その努力と忍耐、過程と成果に関する認識を新たにしたのであった。

2. 生かしてます「技術」、育ててます「協力の輪」

パラグァイにおける日本のODAのうち、技術協力の実施機関としてJICAパラグァイ事務所がさまざまな分野で活動していた。パラグァイは1人あたりGNPが1595ドル（1993年統計）と物質的に豊かになった現在、無償資金協力の対象国からはずされている。また、2国間貸与事業としての有償資金協力（円借款）は、OECF（海外経済協力基金）を実施機関としており、1979年の日パ技術協力協定に基づき、以後1992年までに597億円が融資された。これらに関連した事業のうち、視察したところは表1のとおりである（表1参照）。

表1　技術協力、無償資金援助、移住事業等に関する視察地

A	教育関係
	三育学園
	国立工業高校
	サン・プラス中高校
	イグアス日本語学校
B	農業技術関係
	ピラポ移住地（ピラポ農業協同組合）
	イグアス移住地（イグアス農業協同組合）
	CRIA（地域農業研究センター）
	CETAPAR（パラグァイ農業総合試験場）
	ABASUTO市場（アスンシオン市中央食品卸売市場）
C	工業技術関係
	国立工業高校
	イタイプ・ダム
D	医療技術関係
	LACIMET（熱帯感染症病院）
	イグアス診療所
E	文化関係
	ピラポ移住地（ピラポ日本人会）
	イグアス移住地（イグアス日本人会）
	パラグァイ・日本　人造りセンター

以上のように、パラグァイにおける技術協力、無償資金協力、移住事業等に関する活動現場を数多く視察したが、その内容は複雑多岐にわたっており、そのきめ細やかな援助と協力活動の困難さや、それらの事業に従事している数多くの日本人技術者や関係者のご努力には感服するばかりであった。その中から日本語学校の実態と、パラグァイ総合農業試験場についてレポートしたい。

3. イグアス日本語学校（日本語を教える学校）

ブラジルとの国境パラナ川に近接したシウダ・デル・エステの街から国道7号線、通称「国際道路」を首都のアスンシオンに向かって西へ約41km行った所にイグアス移住地がある。この移住地は、1960年に移住地として造成され、翌1961年、フラム・チャベス移住地からの分家移住者14家族が第1陣として入植した所である。総面積は8万7762haあり、国際道路を挟んで南北に広がっているため交通の便も極めて良く、移住地となっている。1994年4月現在、日系人183戸・934人、現地人1200戸・7000人が生活している。生産活動も入植後20年ほどは試行錯誤の連続で、養鶏・養豚・蔬菜・果樹栽培など多角的営農を試みていたが、農家の経済は安定せず、10年ほど前から導入した大豆と小麦の輪作を根幹とする「不耕起栽培」が軌道に乗り始め、大型機械化農業経営は順調に伸びて、移住者の顔にも明るさが増してきたという。1989年には市制がひかれイグアス市となった。

移住者たちは、入植当初より子弟の教育には熱心であったため、いち早く日本語学校を開設している。すなわち、1962年にスペイン語初級学校を開設すると、翌1963年には、子弟の教育と治安に対する相互協力のため、教育委員会と治安委員会・道路委員会などを組織し、同年9月には日本語学校の前身をスタートさせ、1964年4月正式に日本語学校として開設している。さらに、1978年4月には、全日制の日本語学校となり、同年10月、現校舎が完成した。この日本語学校は、1980年12月に、パラグァイ内務省より法人組織として認可を得た「イグアス日本人会」が運営しており、小・中学部と高等部がある。ただし、高等部は土曜日だけの授業であり、公教育であるスペイン語学校の行事と重なることが多く、ほとんど機能していないのが実情という。

現在の施設設備は、事務室兼職員室、会議・接待室、図書室兼用具準備室、6教室等とスクールバスが1台ある。また校庭の一角に相撲場が建設中であった。スクールバスは1974年にJICAの無償貸与を受けて運行し始めたもので、生徒の登下校用に使用され、1日平均170名もの利用があるという。また、必要な教育機材はJICAの援助で揃えており、1994年度までにコピー機2台、ワープロ2台が備品として整備されている。このように、移住地内の学校の場合、援助があるため、他の学校より施設・設備が充実しているようである。

1995年4月現在の児童・生徒数は、小学部125名、中学部61名で、保護者数は115名である。近年、移住地内に住む日系人以外の非日系人も少しずつ入学するようになり、現在12人ほど在籍している。非日系人の多くは、父親が日本人で母親がパラグァイ人というパターンが多く、家庭内でも日本語は使われなくなってきているため、1年間特別コースで学び、翌年小学1年に編入させる方法を採っている。今後、このような児童に対する教材開発の課題も増大する可能性は大であると思われた。

授業内容は、日本語が主体ではあるが、情操教育（音楽、体育）も取り入れており、中学生には剣道の授業も行っている。クラブ活動もあり、少年野球部・バレーボール部・テニス部・剣道部・書道部などの活動が行われている。教科書は、日本の義務教育段階と同レベルのものを使用しており、日本の書籍会社からの寄贈とJICAの援助によって充当されている。各教員は、日本の学校教育と同等のレベルを維持しようと、シニアー協力専門家の指導を受けて教材開発・研究授業の実施・指導技術の錬磨などに熱心に取り組んできているばかりでなく、児童・生徒の実態にあった授業を進めようと独自の教科書を作成するなど日本とパラグァイの友好と協力の輪を強めていた。なお、授業形態は、公教育であるスペイン語学校との関係で、同一学年が午前と午後に分かれて登校する2部制が敷かれていた。

職員構成は、正式職員3名、開発青年2名、NGOの天理教派遣教師1名、パートの教師2名（大学生と試補の高校生）の8名と事務員1名からなる。開発青年やNGOのボランティアの他に日本語学校を卒業して学校の状況がよくわかる大学生や、半年間の見習い＝試補＝をさせてから教壇に立ってもらう高校生（試補教師）などが教員として活躍しているところは、日本国内の教育事情との相違を際だたせるものであった。それだけ教員不足を反映していることにもなろう。

日本語学校は、日本人会設立による任意学校で、公教育外の私塾的存在であるため、授業料が徴収される。それらの授業料は日本語学校経営の基盤であるため、大半は教師の給料に充当されることから、保護者の負担も容易ではないように思われた（表2参照）。

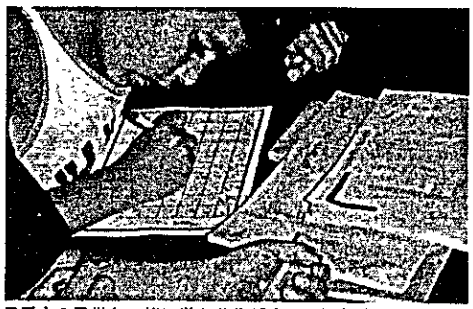
表2　月額の授業料一覧
単位：グアラニー（100GS：5円）

小学生	長子	Gs. 31,000/月
	次子以下	Gs. 26,000/月
中学生	長子	Gs. 29,000/月
	次子以下	Gs. 23,000/月
非日系人子弟		Gs. 30,000/月
高校生		Gs. 10,000/月

このように日本語教育を推進する中で、現在さまざまな問題が起きているようである。すなわち、「日本語教育は日本民族の魂の教育であり、日本語教育にかける意欲は、民族の誇りの蓄積にある」という理念は理解できても、移住当初に比べて生活基盤が確立され、物質的な豊かさと精神的ゆとりの出てきた家庭生活が子供たちの勤労の必要性と意欲の低下をもたらし、時間的余裕は学習意欲の向上につながらず、さらにはパラグァイ人として不可欠であるスペイン語の習熟度の低さなどが生活上の不安材料として顕著になってきたからである。確かに高等教育機関である国立アスンシオン大学や私立の大学に進学し、パラグァイ社会に貢献するような有能な人材も輩出するようになってきてはいるが、ドイツ系や韓国系など他の外国系移住者に比較するとその数は少ないという。スペイン語習熟度の低さが大学入試にも顕著に表れてきていることへの焦りのようなものを感じている日本語教員や日系人の悩みも聞くことができた。日本語学校校長の「日常の生活感覚は日本人。しかし、将来的にはパラグァイ人として生活しなければならない子供たちには、スペイン語を学ばせなければならないという意識はある。なぜなら、高校生になると公立学校へ行かなければならず、授業はすべてスペイン語で進められるからである。校長としての願いは、せめて中学校が終わる15歳までは日本語を教えてあげたい。子供たちにはスペイン語を修得し、日本人の心を持って、パラグァイ人として活躍してほしいから」という言葉は、真実を語っているといえよう。

このように、これからの日本とパラグァイとの協力関係の中で、日系人社会において今何が一番必要かと問うならば、それはやはり教育環境の整備そのものではないかと思われる。現在、国際協力事業団が実施している技術協力事業をさらに推進し、専門的知識を十分に備えた若い日本語教師を派遣して日本語教育の基盤を強化すると同時に、資金協力によりスペイン語学校をも整備し、質の良いスペイン語教師を迎えて日系人子弟のスペイン語の習熟度が高まるような配慮をさらに強化すべきだと考える。

悠久の国パラグァイを旅していると、子供たちが草地でサッカーを楽しむ姿をよく見かけた。その輪の中に混じって一緒に草地を駆け回っていると、底抜けに明るく純真な子供たちの気持ちを肌で感じ取ること


日系人の子供と一緒に学ぶ非日系人の1年生（イグアス日本語学校にて）

日本語学校の授業風景（イグアス日本語学校にて）

ができた。明日のパラグァイを築いてゆくこれらの子供たちにとって、教育こそがかれらの財産ではないかと考えた。

4. CETAPAR（パラグァイ農業総合試験場）

CETAPARは、パラグァイ全体の農業指導を行うためにイグアス移住地内に造られた農業総合試験場である。この試験場の前身は、入植当初、全く農業がわからない移住者に対して農業指導を実施してきた指導農場であり、1962年にラパス、ピラポ、イグアスの3移住地に設営された。しかし、現在はこの役割がなくなってきたので、より高度な農業に対応するため、1985年、イグアスの試験場に3つの指導農場の業務をまとめ、さらに1988年、パラグァイ全体の農業指導を行う組織に改編され、名称も現在のようになった。ここでは試験研究と普及活動の両面の活動がなされているが、最近は試験研究のウェイトが高まってきている。

JICA直営移住地における営農形態は、1974年頃までには①畜産、②野菜、③雑作物の多角経営を行っていたが、畜産の失敗と野菜の市場性の不確立等により、1987年以降、ブラジルから導入した大豆と小麦の「不耕起栽培」を試行したところ経営が安定してきたため、CETAPARでもこの「不耕起栽培」を中心とした研究を続けている。

また近年さらに④土壌研究と⑤病害虫研究を加えた研究活動を行うようになった。

研究成果を概略すると、1）畑作については、不耕起栽培による大豆と小麦の輪作が中心であるが、時々（3年に1回程度）は大根・燕麦等を緑肥として栽培し、地力の維持・回復に努めている。2）野菜生産については、トマト・メロンが主力である。トマトは中型の加工用トマトを栽培し、メロンは、タキイ種苗のF1品種「サンライズ」を中心に栽培している。これらの栽培を日本人農家で働いて自立したパラグァイ人も始めるようになったので、日本人農家ではより高品質の野菜栽培を始めている。3）畜産については、畜産経営を行うには1000haの土地が必要とされるが、現在の移住者の平均的土地所有面積は200～300haであるため、畑作をやらざるを得ない状態にある。移住者の夢は、集約的な畜産経営をすることであるので、現在、高位生産性の畜産の研究を進めているとのことであった。

以上のように、試験研究は農民だれもがその成果を利用できるものでなければならないので、パラグァイ政府との共同研究を推進する必要があり、現在、日本からの技術者9名とCETAPAR職員16名がこれらに従事している。日本とパラグァイの移住事業に関連させた技術協力の成果は、次第に東パラグァイ全域に拡大する傾向を見せ始めており、技術を生かし協力の輪を広げるODAの目的は、着実に達成されている好事例であった。

普及活動については、日本人とパラグァイ人の両者を対象とした①畑作と畜産とを対応させた全パラグァイ永続農法研究会、②マカダミアナッツ研究協議会、③イグアス肉牛協議会の3つの研究グループを育成し実践している。その方法としては、①試

験場の試験を実際に農家でやってもらう。②ブラジルなど先進地を見学したり、指導者を招へいする。③パラグァイ政府の普及員に対する研修を実施する。④パラグァイ人農家をも対象とする活動を推進することなどがあげられる。これらの普及活動は、全パラグァイが良くならなければならないという考え方がその根底にあり、酪農振興のためイグアス移住地周辺のパラグァイ人小農家に対する酪農の産地形成をめざす地域開発事業などは、その趣旨に合致した事例といえよう。

このように、日系人社会を通して技術協力の輪を拡大することが相手国の発展にも役立つという理論は共通理解されてきている証拠といえよう。このことから、移住理念は時間の経過と共に変化するものであること、その変化の根拠となった出来事は、①移住者が100家族を切った。②10年前、「開発青年」という新システムができた。③1994年9月のJICAイグアス事業所閉鎖、などであったという。技術協力は、JICAの直営農場であるからこそできるものであり、専門家が引き上げてしまうともとの木阿弥になってしまう危険性をも含んでいる。

研究普及課の園田さんの案内で施設を見学したが、1）フェンスに囲まれ、11基の監視カメラが稼働中の職員宿舎。2）パラグァイ国家の情報として活用させているほどしっかりしたデータを取っている気象観測。3）地味ではあるが着実に研究成果をあげている土壌分析室と土壌保全室等、細部まで管理が徹底していたことに感心するとともに、ODAの活動が、地球の反対側の地で現地の信頼を得て着実な成果を上げていることを実感し、関係者の尽力に頭の下がる思いであった。

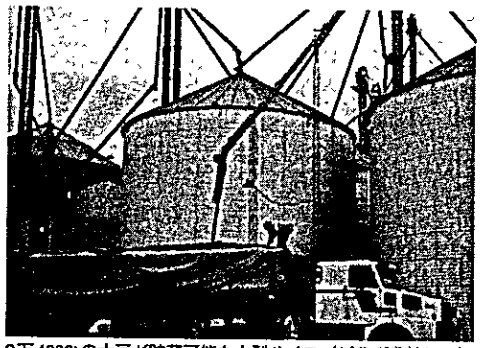
農場では、不耕起栽培に関する作物だけではなく、パラグァイの代表的な輸入作物であるニンニク、玉葱、じゃがいもなどを、生産可能にするための品種導入の研究も行われており、名実ともに充実した試験場であった。

5. 研修を通して

パラグァイに関する知識は皆無に等しかった私でしたが、ODAが教育・農業・工業・医療・文化関係など多方面にわたる援助と協力を行っていること、それらがすべてパラグァイ政府の要請に基づき、不足を

不耕起栽培用の大型農業機械（CETAPAR）。中央の円盤で溝を切り、同時に後方の斜盤から種子が落下する仕組み

テラ・ローシャの土壌分析研究（CETAPAR）


2万4000tの大豆が貯蔵可能な大型サイロ（ピラポ農協にて）

小麦と大豆の不耕起栽培（イグアス移住地にて）

補うという形で実施されていることを認識し、改めて日本とパラグァイとの関係の深さと絆の強さを実感した。特に、移住事業の展開と同時並行で行われていた技術協力は、移住者の生活に直結するものばかりであっただけに、その重要性が実感できた。その中でも特に、ピラポ移住地とイグアス移住地で見た大豆と小麦の不耕起栽培による生産性向上とアグリビジネスに徹した生産形態は、研修前には予想もしていなかったスケールの大きな農業方法であった。何と言っても大豆の輸出に関して、刻一刻と変化するアメリカ・シカゴの大豆相場を衛星通信を利用して即キャッチし、コンピューターをフルに活用してバイヤーと交渉をしている光景は、内陸国パラグァイの他の農牧業風景とは全く異質であり、堅固な協力体制を構築して世界の穀物市場を舞台に、新しい農業の在り方を模索している移住者たちの熱意を十分に汲み取ることができた。しかし、内陸国であるため、気象条件によって収穫が不安定になることと、輸送手段の改善方法などかれらにも心配材料はある。これらのマイナス要素をどれだけ克服できるかが今後の取り組みの重要課題と思われた。今後この営農方法がパラグァイ農業の基盤となり、全パラグァイの農業が発展していくことを願わずにはいられなかった。

6. 開発教育の手法を探る

さて、この研修成果を、どのように学校現場で活かすことができるか、研修後、1学期から食文化をベースにした地理の授業を展開していた3年生に、パラグァイ名物の「マテ茶」を試飲した後で、スライド視聴や文化祭の発表展示物などを活用した、パラグァイ学習を試み、アンケート調査を実施した（表3参照）。その目的は「学びのプロセス」こそが異文化理解のキーポイント、すなわち開発教育のベースと考え、体験学習を取り入れ、原体験を重ねる過程で生徒が習得する知識・感覚・思考方法などを尊重したかったからである。

表3　パラグァイの学習についてのアンケート集計結果（対象：3年生92人）

【1】パラグァイ報告の中で、講話だけでなく食文化の体験学習や展示物・スライド視聴などを通して、いちばん印象に残っているのは何ですか。
1　授業中にマンジョッカを本当に食べることができたこと：14
→甘い味付けもしょっぱい味付けもどちらも

おいしかった：14
2　先生がマンジョッカ畑で、私たちのために本物のマンジョッカ芋を一生懸命掘っていたところ：6
3　授業中にマテ茶（テレレ）を初めて味わうことができたこと：20
　→苦かったが結構おいしかった。不思議な味（素朴な味）だ：12
　→おいしくなかった。苦くてまずい。渋い：10
4　マテ茶を他人同士で回し飲みすることにびっくり。不衛生だ：5
5　授業中にブラジル式コーヒーを味わえたこと：5
　→屑豆を上手に利用する方法がわかった：5
　→意外に苦みが少なくておいしかった：5
6　不耕起栽培農業の素晴らしさと視界360度の小麦畑は日本では見られない光景。一度自分も見たいと思った：5
7　高校生活。ピアスの女生徒。妊娠した生徒への寛大な対応など：5
8　先生自身がとても楽しそうにパラグァイの話をしていたこと：3
9　ニャンドゥティの刺繍がとてもきれい。インディオの神秘的なイメージがよく表れている不思議なものだった：2

【2】学習前と学習後とでパラグァイに対する感想に変化はありましたか。
①国の位置について：
1　アフリカにあると思っていた：18
2　はじめは見当もつかなかったが、今はわかるようになった：17
3　南米であることがわかって、驚いた：12
4　もっと熱帯圏・東南アジア・インドの方かと思っていた：9
5　ブラジルの近く、またはブラジルの中だと思っていた：7
6　日本からとても遠い。行くのが大変そう：7
7　今でもよくわからない：2

②パラグァイ人とその生活について：
1　決して豊かな生活ではないけれど、日本より生活に温かさやゆとりがあり、開発途上国のようには見えなかった：21
2　黒人系かと思ったが、肌の色の白いヨーロッパ系の混血で、びっくりした。特に、子供たちが可愛らしかった：17
3　のんびりしていて時間がゆっくり流れている感じがした：11
4　シエスタの時間に、多くの店が戸締めしてしまうのは良い：9
5　小さい頃から親の手伝いをしていて、日本の子供も見習って欲しいと思った：6
6　パラグァイの生活も、それなりに工夫していて素晴らしい：5
7　テレレ（マテ茶）をいつでも何処でも飲んでいておもしろい：4
8　授業でテレレとマテ茶を飲んで、そのうまさがわかり、パラグァイ人の生活の良さが何かわかったような気がする：3
9　物価が日本に比べて安いと思った：1
10　鉄道の運行回数が少なく、交通網が未発達で不便だと思った：1

③言葉や民族性と教育について：
1　日本ほど教育環境が整っていない。国民全員が受けているわけではないのだなと思った。公教育が半日制なのに驚いた：12
2　高校の自由な精神（意志ある生徒を尊重する）に感動した：11
3　私たちと同じ高校生が、自分の夢などに向かって自主的に勉強していることがすごいと思った。楽しそうに見えた：6
4 黒人が多いと思っていたが、白人ばかりでびっくりした：6
5　高校進学者が少ない。うらやましいような、切ないような：5
6　日本では民族問題など身近にありませんが、パラグァイの話を聞いて民族性と民族の融和について考えさせられた：4
7　日系人の子供たちが、公立（スペイン語）学校と日本語学校の両方に行くのは時間的にも金銭的にも大変だ：4
8　いろいろな民族の言葉が混じっていて、大変そう：3
9　教育現場全体に教材が不足していることに驚いた。改めて日本は恵まれていると思った：2

④日系人の移住と日本語教育について：
1　パラグァイと日本とは、移住やＯＤＡなどを通して密接な関係にあり、日系人が多いことに驚いた：16
2　日本語学校があり日本語もしっかり浸透して

いる。感激した：14
3　日本語が話せると役に立つことが多いので良い。もっと普及させるべき。しかし無理やり教え込むのは良くない。また、より多くの人たちが日本の文化や日本語を学んで欲しい：7
4　日系人の子供たちが、半日単位で日本語とスペイン語の授業を受けているのは大変だと思った。でも偉い。すごい：6
5　日本語教育のために、日本語の教科書を日本から取り寄せているなんて大変だなと思った。また、そこまでしてでも日本語を教えようとする、移住者たちの教育熱心さに感激した：6
6　日系人が多いのだから、日本語教育は良いと思う：5
7　日本語学校の先生の書く字が、日本の学校の先生のよりとてもきれいだなと思った。きっと、正確な日本語を教えたいためだろうと思った。教育熱心だ：5
8　もっと日本語教育のための教材があればよいのにと思った。また、現地でも教材開発を進めるべきだ：5
9　私たちが英語を習うように、地球の反対側のパラグァイでも子供のうちから日本語を勉強しているのは、とても素晴らしい：4
10　本当に日本の教育が必要なのか、意味がないと思う。疑問だ：4
11　日本語教育の内容が日本より難しそうだ：3
12　移住者の子供たちに母国語を教え伝えていけばよいのではないか：2

⑤日本による協力事業について：
1　とても素晴らしいと思った。驚いた。これからも日本が協力して、パラグァイが発展してくれればよいと思う：18
2　日本の技術が相手国の役に立つならば、もっと協力していくべきだろう：12
3　大変な仕事にもかかわらず、多くの日本人が協力事業に参加していて素晴らしい。もっと協力事業に参加すべきだ：10
4　JICAの存在と協力事業がどのようなものか、よくわかった：6
5　恵まれない子供たちに、その時だけの食料を援助するより、食糧を確保するための知恵を貸し、教育の援助をする方がよい：4
6　学校が少ないと思う。だから、学校を造り、もっとたくさんの教科書を提供し、学校内の設備などを充実すべきだ：4
7　ODAがんばれ。日本の誇りに思う。しかし、もっと細かいところまで気を使わなければ駄目だ：3
8　日本国民の税金を使っているのだから、もっと知らせるべき：3
9　確かに「協力隊」ではあるが、互いに学ぶことは多いし、与え合うものも大きいと思った：1
10　協力するのはよいが、日本の協力している所の施設・設備だけが立派すぎてもいけない気がする：1　　11　わからない：5

⑥青年海外協力隊について
1　若いうちから海外での援助活動を希望する気持ちは素晴らしい。そんな生き方にとてもあこがれる。私も機会があったら参加したい：13
2　日本での仕事を休んでまでも海外協力隊員に参加するのはすごい。今はもちろん、これからも幅広く活動し頑張って欲しい：11
3　頑張っているな。素晴らしい。さわやかな感じがする：10
4　言葉も生活環境も全然違う国で仕事をするのは大変だが、いろいろな人に出会え、やりがいのある仕事。楽しそう：9
5　自分の知らないところで、いろいろな人たちがパラグァイのために働いていることを知り、びっくりした。とても良いことだ：8
6　もしかしたら挫折してしまったりするかもしれないのに、「自分の力を試したい」と協力隊に参加した人は、とても勇気があって強い人だと思った：5
7　協力隊の活動内容を理解してもらうために、もっとPRすべき：2
8　技術者や教育者がもっと多く派遣されるとよい：2
9　栃木県出身の協力隊員もパラグァイで活躍していたので驚いた：1
10　相手国に喜ばれていることが、協力隊にとって大切なことだ：1
11　日本の協力活動にばかり甘えないで、現地の人も自力で頑張って欲しい：1
12　見知らぬ所に行けない。勇気がない：3
13　目的を誤らないようにしなければならない：2
14　よくわからない。組織もあることを知らなかった：5

この結果、学習前と学習後との生徒の理解度に明確な変化が表れていることに気付いた。特に、最も基本的な「位置」の確認でも、学習前は多くの生徒が「アフリカにある」もしくは「名前も場所も知らなかった」と答えていたが、それらの漠然としていた認識が整理されたこと。また、パラグァイ人の生活については、「マテ茶」と「シエスタ」と「マンジョッカ芋」が印象深かったことがわかる。特に「マンジョッカ芋」と「マテ茶」は授業の中で試食・試飲したこともあって、生徒の興味と関心が高かったのであり、「シエスタ」は日本にはない生活習慣であったことと、昼寝の良さが生徒に好印象を与えたものと思われる。そして、「決して豊かではないけれど、日本より生活に温かさやゆとりがあるように思った」、また、「のんびりしていて、時間がゆっくり流れている感じがした」と、むしろかれらの生活を羨望する傾向すらつかめた。言語・民族性と教育についても、生徒は日本との違いが明確である事象に対し、「黒人が多いと思っていたが、白人ばかりなのでびっくりした」とか、「もっと宗教に凝り固まっていると思っていたが、そうでもなかった」「日本ほど教育環境が整っていない」など、前述の「地球の裏側」的感想を述べており、かれらのエゴイスティックな価値判断基準を知ることができた。しかし、日本による協力事業や青年海外協力隊の活動などについては、「とてもすばらしい。これからも日本が協力してパラグァイが発展してくれればよい」「若いうちから海外での援助活動を希望する気持ちがすばらしい。そんな生き方にとてもあこがれる。私も機会があったらぜひ参加したい」など前向きの意見も多く見られた。

このように、かれらはスライドやビデオを視聴して初めてパラグァイ人の日常生活を認識し、日本人移住者たちがパラグァイ社会でパラグァイ人と協力して生活していることの意味、すなわち、「共に生き、共に発展する」ことの重要性をも認識していった。このことから、「共に生きる」意識を尊重するならば、地球には表も裏もないのだということが、ごく自然に理解されたことになる。

このように、生徒たちは、さまざまな体験活動を通してパラグァイについてのより正確な知識を身に着け、理解力を高めていったのである。以上のことから「学びのプロセス」を大切にして授業をどのように展開させていくかが開発教育のキーポイントと思われた。

なお、この「学びのプロセス」についての最終確認をすることも大切であるので、中間考査の問題の一部に「パラグァイ」を取り上げ、学習内容の定着度と浸透度を探ったところ、正答率は75％に達し、パラグァイを教材とした開発教育は、一応納得のいく結果を導き出すことができた。

7. おわりに

広範なODAの事業実態を具体的に理解できたことは、研修全般を通して最大の収穫であった。また、それら諸活動に従事していた日本人専門家・シニアー協力専門家・青年海外協力隊員・開発青年、さらには現地の日系人・パラグァイ人たちとのさ

まざまな出会いを通して心の交流ができ、物理的にも精神的にも充実した研修であった。現在、栃木県出身の移住者と青年海外協力隊員、アマンバイ日本語学校の先生などと、互いの情報を交換しているが、現地で十分に理解できなかったことなどフォローすることができ、パラグァイへの認識と理解を深めるよき手段となっている。また、パラグァイ研修での体験レポートと異文化理解の体験学習の実践を通して、「共に生きる輪を作り・広げる」ための開発教育の捉え方、その手法などを考察してきたが、これらの活動が教育的効果を発揮するまでには、それなりの時間を要する。このことは、国際協力活動においても同様であり、その速さが地域によって異なるだけのことである。なぜなら、地球上のさまざまな国と地域の人々が、自分たちを取り巻く自然環境と社会環境を大切にして活動するとき、それらの活動をより円滑に進めるために他との協力体制を取ろうとするのは、ごく自然だからである。従って、いかなる協力・援助活動も即時性や即効性を期待してはいけない。共存・共栄のための自助努力をしようとする力を育てることが肝要であり、そのためにも国家建設の担い手となるリーダーを養成することが急務である。その役割を担うのはやはり「教育」しかないと思われる。ただし教育的効果が発揮されるまでには相当の時間を要し、それまでの時間の経過こそが「開発途上の姿」なのだと思う。今回のパラグァイ研修は、地球の反対側から改めて「教育の重要性」を認識させられた好機であった。また、パラグァイ到着早々の「地球の裏側」発言以来、「共に生きる」とはどういうことなのかを考え続けてきたが、今ここにその糸口を見いだしたように思う。

今後も日本のODAがパラグァイ社会の発展に貢献することを願い、パラグァイと日本の友好・協力関係がさらに深まっていくことを望むものである。

体育の授業をする青年海外協力隊員（サン・ブラス中・高校にて）

「インシャーアッラー」
～神の心に生きる人々～

徳島県立貞光工業高等学校
教諭（英語）　吉岡雅樹（エジプト・ジョルダン班）

1. はじめに

当初、私がこの研修に期待していたものは、教育の現場を見て自分自身の仕事に生かすことと、いつも渇水状態にあるこの地域で、水を有効利用する知恵を学ぶことであった。教育に関しては、訪問した時期がちょうど夏休み中であった関係で、直接授業などを見ることはできず、いろいろな人の話や資料などでアウトラインをつかんだだけである。そこで、このレポートでは教育事情のことは割愛させていただこうと思う。

しかしそれでも10日の訪問の間に見聞きしたすべてを要領よくまとめるのは難しく、どうしても大切なことを抜かしてしまうと思われるが、お許し願いたい。

2. エジプト地方視察

エジプトの国土の9割は砂漠で、人が普通に生活できるのはナイル川や地中海に沿ったごく一部の地域に限られている。その中でも大都市に人口が集中しており、首都のカイロにはエジプトの6000万人のうちの4分の1が生活している（写真1）。そこには高層ビルが立ち並び、広い通りをたくさんの車が走っているが、よく見ると馬車が混じっていて、たまにロバに乗った人さえ見かける。大都市でも昔ながらの生活が残っている。

3日目に地中海沿岸のアレキサンドリアまで日帰りのバス旅行をした。カイロからアレキサンドリアまで、ナイル川のデルタの西端沿いに、「砂漠道路」と呼ばれるハイウェイがほぼ一直線に通じている。約200km、車で3時間程度という距離である。帰りは水田の広がるナイルの低地を通った。踏んだ土地はエジプト全土から見ればごく一部で、カイロ郊外のドライブといった感じであったが、それでもカイロの市街地とはかなり異なった、一般の人々の生活を見ることができた（写真2）。そこで意外に思ったことは、荷物を運んだり自分が移動したりするのに普通にロバが使われていることである。また小川で水牛を洗っているそばで子供が水浴びをしたりしているのも見た。小川といっても運河のようで、水はあまりきれいではない。それでも非常

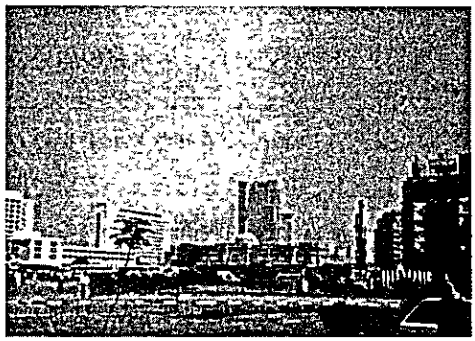


写真1　カイロ市内

写真2　エジプトの地方

に楽しそうであった。途中、ある施設の見学中に、ロバに乗った家族が通りかかったとき、写真を写させてもらったりロバに乗せてもらったりしてお邪魔をした。これが日本であれば「この忙しいのに！」という反応が返ってくるところであろうが、何回でも気持ち良く応じてくれた。

このように、むやみに先を急がず、その時その時の生活や出会いを楽しんでいる様子、またバスが止まったときに群がってくる、まるで楽しくて楽しくてたまらないといった様子の子供たちの表情、これらは、楽しみを犠牲にして毎日あくせく働いてきた日本人が失ってきたものだと思った。田舎では家屋も服装も日本よりずっと地味で、本当に貧しい印象を与えるが、日本よりも不幸であるかどうか、疑問に思う。

3. アラブ人の気質

アラブ人には時間空間の概念がなく、何日の何時に会おうと約束してもすぐに忘れ、3人の人に道を尋ねると3通りの答えが返ってくる、と言われる。実際、私も、ホテルの売店で切手を買い、後でくれる約束のお釣りを結局もらえなかったし、エジプトを離れる日には、マイクロバスを頼んだのにすっぽかされて飛行機に遅れそうになり、急いでタクシーを呼んだ。またジョルダンで中国料理を食べに行ったときは、マイクロバスの運転手が初めから道を知らないのに、知ったふりをして出かけ、途中道を尋ねた人も、知らないのに知ったふりをして教えてくれ、1時間も同じ所をぐるぐる回った末、国際協力事業団（JICA）の職員に助け出された。

「インシャーアッラー」(神が望むならば)、「ブクラ」（明日）、「マレーシュ」（Don't mind.）の3つを『アラブ人のIBM』と言うそうである。無責任さを表すことばのようであるが、カイロの日本人学校の吉岡俊輔先生によると、約束をすっぽかされても怒らないそうである。自分の予定が狂っても、それはアラーの神の御心として受け入れる。このような考え方によってアラブ人は昔から楽しく謙虚に生活してきた。これを、日本文化より劣っていると断言することができようか。吉岡先生によると、このように他の文化を受け入れ、尊重すること、すなわち「文化の相対化」こそ日本文化から落ちこぼれて苦しんでいる人を救う道でもある。

4. エジプトの水事情

しかし、エジプト・ジョルダン国内の見学を進めるうちに、「文化の相対化」が大変難しい場合もあることを知った。

話は先の「砂漠道路」の旅に戻る。エジプトはほとんどが水のない砂漠であるが、増え続ける人口を養うためには砂漠緑化により耕地を増やさなければならない。「砂漠道路」付近はその最前線で、いろいろな潅漑方法が試みられている。主なものは、ナイル川からポンプで用水路に水を揚げ、そこからパイプラインで農地に送り、センターピボット、スプリンクラー、サイドホイールなどの方法で給水するもので、中でも注目すべきものは点滴（ドリップ）と呼ばれ、管に穴を開けることによって、一滴も無駄にせず、直接樹木や作物に水をやろうとするものである。

用水路が張り巡らされ、隅々まで潅漑施設が行き渡り、農業が発達すれば、やがては酪農、牧畜、養鶏などの産業も興り、さらに食品加工、農機製造などの工業も発達し、地域の活性化につながるものである。しかしマイクロバスの窓から見た限り、それほど産業が発達しているようにも見えない。説明によると、用水路の工事も思うように進まず、新しい潅漑方法もなかなか普及しないとのことである。それを指摘すると「たかだか2000年の歴史しかない日本人に5000年の歴史を持つエジプトのことがわかるか」と言われるそうであるが、問題は歴史の長さではなく、「すべてをアラーの神に委ねる」という宗教的な謙虚さのマイナス面であろう。

「砂漠道路」沿いには、用水路の届いていない所でも、みかん、オレンジ、りんご、なし、ぶどう、モロヘイヤなどの大規模な農園が見られ、その多くはきれいな塀で囲い込まれ、立派な門が設置されている。聞くところによると、先に門を作り、あとから囲い込むこともあるそうである。

それらの農園では、砂漠の地下26～30mの所にある化石水を利用している。これは工業用水としても使われていて、降雨がないため、水位は下がる一方である。その速度はだいたい1年に1cmで、水位が下がると塩分濃度が上がり、工場排水による汚染も進む。民間企業の関係者はこのことに非常な危機感を持っているのに、国営企業の人々は、特別信仰心が強いからか、それとも自分のもうけと直接関係していないからか定かでないが、たいして気にもしていないとのことである。

地中海に近づいた頃、「砂漠道路」は海抜マイナス2.7mのマリウッド湖にぶつかった。不気味に濁り、異臭が漂っている。工場排水が処理されないまま流し込まれ、しかも、そこで漁が行われているとのことである。「水俣病のような公害病はないのか」と聞くと「そのような病気が発生している可能性は十分にあるが、病気になっても医者に行けない人も多いので、表面化していない」という答えだった。恐ろしいことである。

水や農業に関して日本からもさまざまな援助が行われているが、そのうち、カイロ大学園芸バイオテクノロジー研究所と、アレキサンドリアとタンタ市の間にある米作

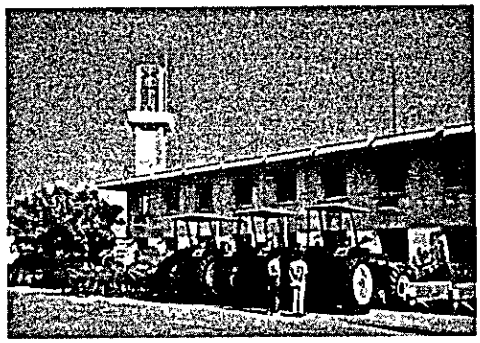


写真3　米作機械化センター

機械化センターを見せていただいた（写真3）。前者では、虫に強いエジプトクローバー、ウイルスに強いそらまめ、乾燥や塩害に強い小麦などが研究されていた。バイオテクノロジーというと、具体的にどんな仕事をするのだろうかと前から疑問に思っていたが、見学した所では、研究時間のほとんどが「組織培養」に使われているようであった。植物の組織を培養しながら、ある技術によって細胞の中からDNAを取り出したり、別のDNAを入れたりするそうである。米作機械化センターの方も、かなり地域に貢献しているようであり、「アラーの神によってもたらされた」と受け取られているようである。「砂漠道路」より東のナイル川の近くを走るハイウェイ沿いには広々とした水田が広がっていて、日本にいるような錯覚を覚えた。時折見かけるロバが、自分は今エジプトにいるのだということを実感させてくれた。

5. 国際理解、援助などについて

エジプトでの最終日には、エジプトで唯一の治療費無料の小児科があるカイロ大学小児病院を見学した。ここは確か先日村山総理が日本からの資金援助を約束した所だと思う。この病院は小児心臓外科など最先端の医療が行われている。しかし、カイロやその周辺だけでなく、アスワンやリビアからもやって来るという患者や家族でいつも超満員で、多くは椅子に座れず、床にペタンと座って順番を待っていた。新病棟の建設がなかなか進まず、しばらくはこの状態が続くとのことである。途中で案内の人にトイレの見学を勧められたが、私は大勢の患者にはばまれて、そこへたどりつけなかった。無事見てきた人は何も言いたくないようであった。ひどい状態であったことがうかがわれる。

この原因の一つは予算不足である。現在は保健省の予算で運営しているが、他に頼らずに自分たちだけで運営できればそれに越したことはない。しかし、そのためには有料にしなければならず、そうすると金持ちだけの病院になってしまう。その保健省の予算も、事務手続きが煩雑で、思うように使えない。そのため院内の衛生管理といった最低限のことに手が回らない。ハイテク関係のことはだれもが注目するが、基本的な生活習慣、すなわち石鹸で手を洗うとか爪を切るとかトイレに物を捨てないとかいったことがなかなか徹底しない。このような説明を受けてから病院内を見学したが、確かに、最先端の医療に似合わないような、爪を伸ばしてどぎついマニキュアをした看護婦が多く見られた。

新病棟の建設がなかなか進まないもう一つの原因は、用水路の建設が進まない原因と同じ、アラブ人独特のおうようさ、つまりムキになって仕事をしないことであろ

う。

援助は施しではなく自助努力を助けることであるということは常識中の常識であるが、エジプトの場合、「インシャーアッラー」(神が望むならば) という生活信条と「自助努力」がどう調和するのだろうか。また、どのような状態を目指すべきなのだろうか。例えばロバをやめて車を使うようになれば、日本同様、便利になる一方、生活や自然を味わう余裕を失うだろう。

6. ジョルダンを訪問して

ジョルダンの首都アンマンはエジプトの首都カイロより涼しくて静かで洗練されているというのが、着いた時の印象であった。第一、アンマンでは道路に座り込んでいる人をほとんど見かけなかった (写真4)。

ジョルダンは日本よりも小さく、国土の80%が砂漠か荒れ地で、天然資源もほとんどなく、たくさんの国と国境を接しているため、国防にも力を入れなければならず、おまけに多数のパレスチナ難民をかかえている。このように困難な状況にあるにもかかわらず、洗練された、清潔な印象を与えるのはなぜだろうか。まず挙げられるのはやはり「教育」であろう。JICAの資料によると、ジョルダンでは教育が優先事項となっており、1990年度予算の8.75%が教育に割り当てられている。また国連パレスチナ難民救済事業機関 (UNRWA) の70%以上の努力が教育援助に向けられている。そのためジョルダンの教育水準は非常に高く、湾岸産油国へ技術者を送り出しているくらいで、「知的出稼ぎ」と呼ばれている。しかし全体に高学歴志向のため医師やエンジニアが余りぎみで、技能を持った中間レベルの人材が不足しつつあり、近年は職業訓練校の設立に力が注がれている。UNRWAのWadi Seer職業訓練校の山川敏彦専門家も「技術を持つ人を尊敬する社会を」ということを強調しておられた。

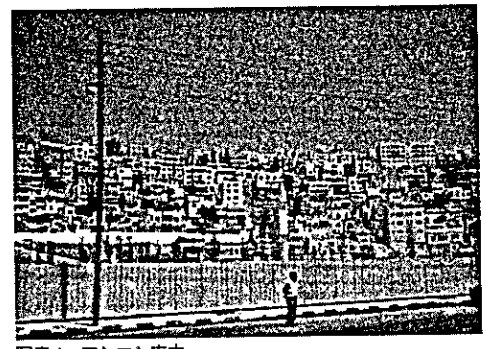


写真4　アンマン市内

この国に赴任した青年海外協力隊員やJICA専門家やシニアー協力専門家の人たちは、赴任当初、こんな国になぜ援助が必要なのだろうかといぶかるそうである。しかし何事も表面を見ただけではわからない。ある程度の期間働いた後、これらの人たちを必要とする場が数多くあることがわかってくる。

7. シニアー協力専門家の活動

JICA事務所でジョルダンの概要について、水資源開発と観光開発と環境保護について、またその前提となる和平についてお話をうかがった後、私たちがまず訪問した所は、シニアー協力専門家の青木喜久氏が生活指導を行っている少年擁護センターのBoys' Homeであった。これは家庭崩壊でホームレスになったり犯罪を犯したりした

子供たちのための生活と教育の施設である。同種の施設は、私立を含めて全国に200ほどあるが、実態はほとんどわかっていない。このBoys' Homeも、青木氏が赴任した時には、悪い面はほとんど知らされず、とても立派な教育が行われているように聞いたという。実際には予算と人手不足のため、子供たちはかなりひどい扱いを受けていたそうである。ゴーグルなしで溶接の実習を行い、眼が腫れ上がり、しかも薬代も病院へ行くバス代もないという状況であった。青木氏はそれらの費用を自己負担し、金属加工用のゴーグル、手袋、防塵マスクなど必要な物を買い揃え、一人ひとりの子について親身になって考え、その結果徐々に改善していった。トイレがきれいになり、暴力が減り、逃げ出す子が少なくなったそうである。説明を受けた後、施設内を見回り、生活している子供たちにも会った。かれらはとても明るく元気であった。

青木氏は、スクールバスが欲しいということ、職員が19人いたのに15人に減らされてしまい、大変忙しいということを話しておられた。

8. 難民キャンプ訪問

その後、2日間に分けて2カ所のパレスチナ難民キャンプを視察した。難民キャンプというとテント生活のようなものを連想するが、パレスチナ難民キャンプにテントは一張りもなかった。最初に訪問したWihdatのキャンプは日本のちょっとした中都市のようだった。翌日訪れたBaqaaのキャンプはもう少し貧しい感じで、コンクリート平屋建ての粗末な家が並んでいた。そこには8万人が住んでおり、UNRWAの本部がある。UNRWAは、このキャンプで学校16、保健所1、その他の施設3つを運営している。このキャンプで会った子供たちも明るくてかわいくて元気いっぱいだった（写真5）。

写真5　難民キャンプの子供たち

難民のための職業訓練にはJICAも大きな役割を果たしている。以前に行われていた石油輸出国機構（OPEC）からジョルダンへの援助は、物質面だけだったようである。これに対して、JICAはきめ細かな調査に基づいたきめ細かな援助を続けていて感謝されている。

9. 青年海外協力隊の活動

ジョルダンで訪問した青年海外協力隊の活動の現場は、青少年活動施設では茂田智子隊員が活動しているアリア女王基金保育園（Queen Alia Fund Madaba Center）、藤原章裕隊員が活動しているハヤカルチュラル・センター（Haya Cultural Center）、養護施設では杉野寿子隊員の活動している知的障害者施設のYMWA身体障害者木工技術訓練センター（YMWA Sheltered

写真6　茂田隊員と子供たち

写真7　工作教室

Workshop）である。茂田隊員は「アラビア語がよくわからない」と言いながらもよく子供たちの心をつかみ、子供たちに負けないぐらい明るく活動していた（写真6）。Haya Cultural Centerは、ジョルダンで最も設備の整った文化センターで、プラネタリウム、科学展示室、図書館、ゲーム場、劇場などがあった。私たちは子供の立体感覚を養うことを目的とした工作教室に参加した（写真7）。

エジプトもジョルダンもイスラム教国である。イスラム教では偶像が徹底的に否定される。そのため、人や動物や物を写実的に描いたり彫ったりする文化が発達していない。じゅうたんなどは、複雑で抽象的で平面的な、いわゆる「アラベスク模様」が用いられる。この影響で子供たちも小さい

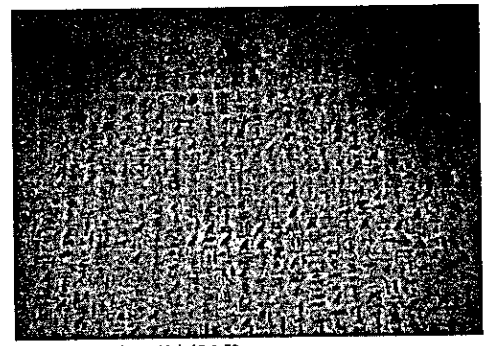


写真8　ピラミッド内部の壁

時から立体感覚を身に着ける機会に恵まれていない。Haya Cultural Centerの工作教室は、子供たちの中に眠っているこのような能力を目覚めさせることをねらっている。私たちが訪問した時は、いろいろな箱の展開図に色を塗って貼り合わせる作業をしているところであった。

10. おわりに

両国あわせて10日足らずの滞在であったのに、思ってもみなかったような文化の違いを体験することができた。外国の文化の中で無視できないのが「宗教」であろう。宗教が社会生活にマイナスの影響を与えている例もいくつか見聞きしたし、それが形作っているよい国民性、つまり謙虚さや敬虔さについても学ぶことができた。

研修の合間には古代エジプトやローマ帝国時代の遺跡や大きなモスクの観光も行い、それらを造った人々の精神の偉大さに驚嘆した（写真8、9、10）。しかしそれらエジプトやローマの文明が滅びてしまったことに、ある不安を覚えたことも確かだ。

今のエジプトの砂漠道路沿いの大農園の水源の地下水はいつかは汚れて使えなくな

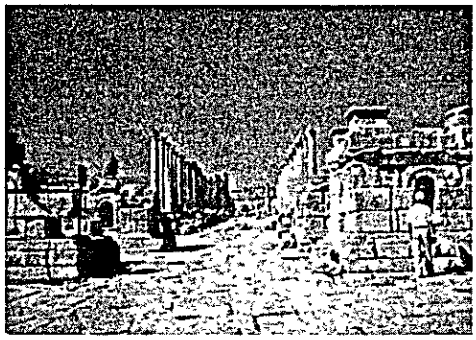


写真9　ジェラシュの遺跡

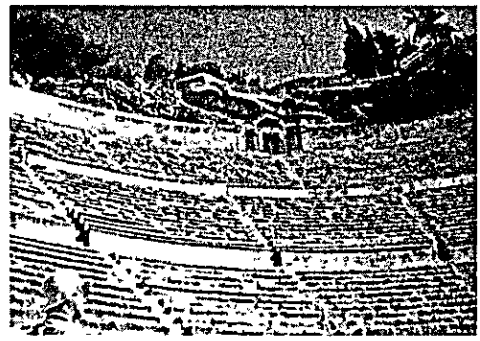


写真10　アンマン市内の劇場（フォーラム）跡

る。その前にナイル川（アスワンハイダム）からの灌漑用水路が届かなければ、あの立派な門の付いたたくさんの広大な農園も、ただの塩分や有害物質だらけの遺跡になってしまうであろう。それもアラーの御心だと言って済ますことは大きすぎる。

しかしこれは地球全体の縮図とも言える。石油などの資源はじわじわ減っていき、その一方海や空気やオゾン層の汚染、破壊はじわじわ進行している。しかも、数年前のユネスコの調査で「日本の若者が一番環境問題に無関心」と出ていたのである。特定の宗教の悪い影響も受けず、昔から自然を大切にしてきたはずの日本で、最も環境問題に対する無関心が蔓延しているというわけである。この原因が、流行を追って使い捨てをすることに忙しいことにあるのか、受験競争にあるのかわからないが、どちらにしても、心の余裕のなさが根底にあることは確かだ。ここにも日本以外の文化、例えば、エジプトの、ロバに乗る生活、「インシャーアッラー」の生活信条などを学び、理解することの意義があるかもしれない。

しかし同時に、日本が世界の中で積極的に果たすべき役割についても忘れてはならないであろう。これについては次のようなことを中心に生徒に伝えていきたいと思う。

○急速に国際化が進む現在、どの国とも無関係ではあり得ない。

○開発途上国には環境問題、貧困の問題などいろいろな問題があるが、先進国にもその責任の一端があり、先進国はその解決のために責任を果たさなければならない。

○日本からも多くの方々がJICA専門家、シニアー協力専門家、青年海外協力隊員となって派遣されており、献身的に働いている。

○お金や物資を送るだけでは援助にならない。また相手国の国民性を考えなければ援助も効果がないことがある。諸外国の文化やものの考え方を理解することは日本人としての責任を果たすうえでも大切なことである。

緑のマレイシア

兵庫県立芦屋南高等学校
教諭（理科）　中林千景（マレイシア班）

1. はじめに

平成7年7月26日～8月3日の9日間、国際協力事業団（JICA）主催による高校教師海外研修に参加させていただくことができた。私が参加できたのは、マレイシアを訪問するコースで現地でのODA活動の視察がその目的である。スケジュールはハードで、マレイシア標準工業研究所（SIRIM）、サラワク総合病院、野生動物リハビリセンター等さまざまなJICAの活動現場を見学する機会に恵まれたが、ここでは、私が最も興味を引かれていた熱帯雨林の保護・活用に関する2つのプロジェクトに絞って報告したい。

2. 熱帯雨林の重要性

東南アジアのほぼ中央に位置し、豊かな自然・資源に恵まれたこの国において、熱帯雨林の破壊が言われるようになってから久しい。

また、熱帯雨林を有する途上国の多くが、手っ取り早い収入源として、森林資源を伐採し、累積債務の返済に充てていることは周知の事実である。

そのため、マレイシアに着くまでは、私もどれほど荒廃した風景が広がっているのだろうかと、半ば覚悟を決めてやってきたようなところがあった。

しかし、着陸態勢に入った機内から眼下に広がるクアラルンプール近郊の風景は、案に相違して、日本では想像もつかない、生命力にあふれた濃い緑の森林一色であり、マスコミの報道に裏切られた思いと、安堵の思いとが交錯したのを覚えている。それはまた後に、再び裏切られることになるのだが……。

1980年代前半から熱帯雨林の破壊が声高に叫ばれ、国連食糧農業機関（FAO）が1985年を国際森林年に指定し、その保護が急務とされるようになった。ここで少し熱帯雨林の問題について触れておきたいと思う。

熱帯雨林は種の宝庫、巨大なgene poolであると同時に、地球全体の気候の調整・変動の緩和、酸素の供給と二酸化炭素の吸収・固定、土壌の浸食・洪水・土砂崩れの防止、水の供給等といった、地球環境全体

への重要な役割を担っている。また、地域社会にあっては、食糧・燃料・医療の供給源でもあり、産業資源としての性格も兼ね備えている。事前研修の際、マレイシア政府の方が、「この国は、これまで飢えを経験したことがない」と話しておられたのもこのためであると思われる。

しかし、また一方で「熱帯雨林は、緑の衣をまとった砂漠」と形容されるほど、もろいものであるとも言われている。

このように言われる理由として、高温多湿の気候下で微生物による有機物の分解が非常に速いスピードで行われるため、生じた養分は土壌に蓄積されないこと、有機物のほとんどは植物体そのものの中に取り込まれてしまうことが挙げられる。

そのため、軟らかくて養分に富んだ表土層は厚さ数cm止まりで、その下には硬い岩盤や粘土層であることがほとんどである。

さらに、これら低緯度地方では、一度地表がむき出しになると、乾期には強い日射しのために土壌はカチンカチンに固まってしまうことが多く、雨期には大量の雨によって表土が押し流されてしまうこともしばしばである。

一度伐採された熱帯雨林が元のように再生することは難しいと言われるゆえんである。

熱帯雨林の破壊の原因と言われているものには大きく分けて3つある。木材の伐採、農業開発、牧畜である。当地マレイシアの熱帯雨林破壊の原因は木材の伐採であり、現在では、マレイ半島での原木伐採は禁止されており、ボルネオ島のサバ・サラワク両州でも数年後には禁止される見込みであるという。

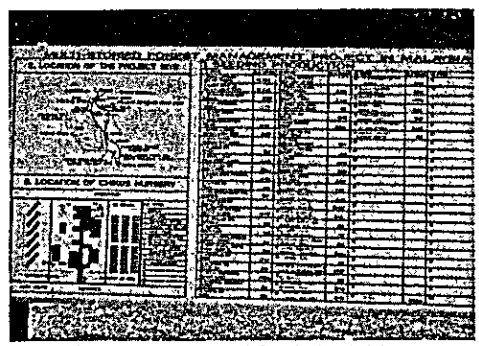
しかし、マレイシアにとって、木材輸出は大きな収入源であり、急激な伐採禁止は無理であることから、伐採方法の見直し、森林資源を有効に利用する方法の開発、木材の商品としての付加価値を高めることは急務である。

今回の研修で、「複層林施業技術現地実証調査プロジェクト」と「マレイシア・サラワク木材有効利用研究プロジェクト」という、木材の乱伐による熱帯雨林破壊を防ぎ、マレイシアの基幹産業の一つである森林資源を保護するために行われている2つの研究施設を訪ねたので報告したい。

3. 複層林施業技術現地実証調査プロジェクト

7月29日（土）ペラ州ビドールにある複層林施業技術現地実証調査プロジェクト（以下「複層林プロジェクト」と略）の事務所を訪ねた。このプロジェクトは2つの用地を有するが、今回訪ねたのは、ビドールにある現地事務所とその近郊にあるチクス・サイトである。

民間業者による産業造林にはいくつかの



複層林プロジェクトの立地、苗木保有量の案内板

問題点が指摘されているが、その一つは、そこで植樹されるのがチップとしての用途しかないユーカリ・アカシア等であり、商品価値が低いこと、また、単一の早生樹種であるため生態系の多様性に乏しいことである。

ユーカリは、繁殖力が旺盛なあまり、土中の養分を多量に吸収し、他の植物の生育を妨げるとも言われている。

また、もう一つは、かれらの行う選択的伐採である。皆伐の乱暴さは言うまでもないが選択的伐採においても、40～50mの大木が切り倒されるため、周囲の樹木も否応なく倒木の憂き目に遭うこと、重機を用いての伐採・搬出および道路造成に伴って、周囲の森林も破壊してしまうことなどの問題点が指摘されている。

このような点を念頭に置いて行われているこのプロジェクトでなされている研究は以下の通りである。

(1) 複層林造成樹種の選定

用材として価値の高いフタバガキ科ショレア属を選んで造林を行っている。

(2) 複層林のタイプ

フタバガキ科は、皆伐した日当たりの良い草地では育ちにくいため、アカシア・アマンギウムを先に植え、その後にフタバガキの苗を移植して育てる方法を取っている。効率の良い造林のために、フタバガキとアカシアの割合を変えたり、植林のパターンを変えたりしている。

(3) 育苗・植え付けおよび保育技術

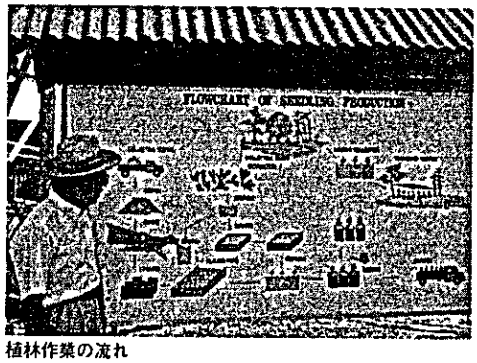
各地から直接集めた種子を育苗場で育て、苗としている。

(4) 伐採・集材方法

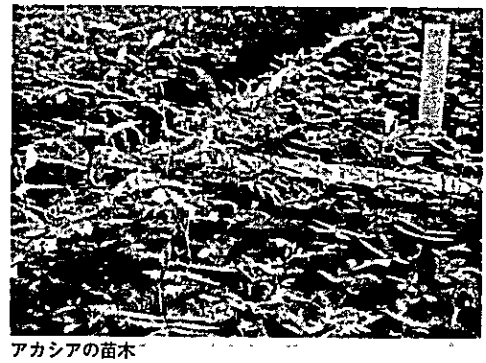
(5) 環境への影響等の実証試験

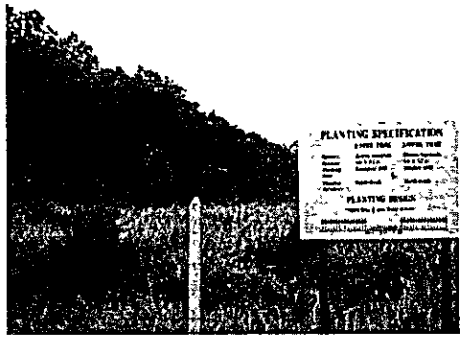
1991年11月から行われているこれらの研究は、さまざまな困難を乗り越えながら進められていた。

私が聞くことができただけでも、まず、フタバガキ科の種子から苗を育てる場合、落果からの発芽率が非常に悪いため、落ちる前の種子を取らねばならないこと、その上、種子のできる時期が一定ではないため集めるのが非常に困難で、各地から情報を集め種子のできそうな木のある所へ出かけ、危険を冒して非常に樹高の高い木に登り種子を集めていること、生存・成長率を向上させるため、苗を育てる際にも、共生関係にある菌根菌（マイコライザー）を感染させたうえで移植していること、などで

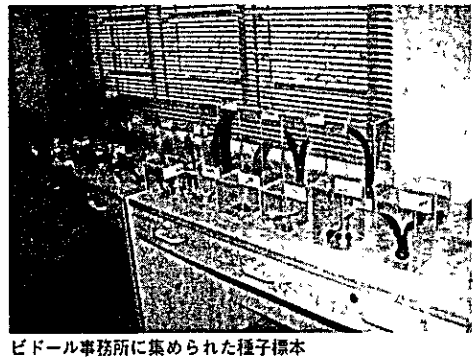


植林作業の流れ


アカシアの苗木



チクス・サイト


ビドール事務所に集められた種子標本

ある。

また、昨年7月には、自然発火により大規模な山火事が発生し、鎮火までに3週間もかかったため、関係者はその間不眠不休の消火作業にかからなければならなかったことや、近くの農園の牛がせっかく造林したサイトに入り込み苗を踏み荒らしてしまったことなどを聞くにつけ、自然を相手にした地道な活動を笑顔で続けておられるスタッフの方々には頭の下がる思いがした。

2～3年単位でマレイシアへ派遣され、現地スタッフへの技術供与をしながら研究を進めることは、それだけでも苦労の忍ばれることであるが、生育に時間のかかる植物を相手に、ある意味では、その成果を最後まで見届けることなく現地を去らねばならないこともある大変な仕事をされていると痛感させられた。

この緑にあふれるマレイシアに来て、当初予想したほど森林が破壊されていないと安堵した私は、ここでやはりそうではなかったことを知らされる。

セランゴール州、ペラ州近辺には豊富な錫が産出し各地に錫鉱山の跡が見られた。深く掘り返したために地盤がとても緩くて建物が建てられないことを聞いたり、痩せた土が地表に露出しているため植物が非常に育ちにくく、灰白色の不毛の荒れ地がチクス・サイトの近辺に広がっているのを目にした。

また、森林を伐採した後、森は再生しつつあるが、天然林と本当に呼べるものは、マレイ半島には少なくなっているということも聞いた。

愕然とした。表面だけ見て、「多くの緑が残っている」と安心していた自分の浅はかさを悔いた。天然林の貴重さといえば、チクス・サイトの天然林に案内していただいた時に、「人工林とこの天然林と、気温や湿度が違うのに気付かれましたか？」と聞かれて、天然林内では気温が低く湿度が非常に高いことに気が付いて驚いたものだった。多様な生態系のなせる業なのだろうか？　そのような条件は、種子の発芽には非常に都合が良いのだそうである。

4. サラワク木材有効利用研究計画プロジェクト

8月1日（火）サラワク州クチンにある木材有効利用プロジェクトの施設を訪ねた。森林資源の減少を防ぎ持続的な経営を図るために、1989年に国際熱帯木材機構

(ITTO) から勧告を受けたことによって始められたプロジェクトである。

年間の伐採量を900万m³までに減らすことを目標に、これまで50％程度出ていた廃材の割合を減らし、利用されていなかった難処理材をも利用するための研究がなされている。

南洋材合板の原木はマレイ半島やフィリピンからは産出されず、ボルネオ島のみからであることから、木材・紙の原料として年間約1億m³を輸入している日本にとってもこのような研究は大きな影響を与えるものと考えられている。研究内容を要約すると——。

(1) 木材の特性を調べる

3000種以上あると言われている多様な樹種の材質を調べ、適正な用途を研究する。今回は、強度を調べる破壊検査のほかに超音波を使った非破壊検査、電子顕微鏡を用いた組織検査の様子などを見せていただいた。

木材積層、接着技術研究室

製材機器

(2) 製材・機械加工技術の向上

難切削材として未利用の樹種の製材加工技術を研究する。

巨大な製材機の目立てや表面仕上げの様子も見せていただくことができた。

(3) 木材の乾燥技術の研究

切り出した材木を放置すると、腐敗したり、ゆがみを生じたりすることから、品質を向上させるための乾燥技術の研究を行っている。ここでは、木材を貯蔵する巨大な冷蔵庫が置かれ、乾燥スケジュールや真空乾燥に関する研究を行っていた。

(4) 木材積層・接着技術

各種の樹種を用い、商品価値の高い合板を作るための技術研究を行っている。

樹種の組み合わせを変え、接着剤・プレス機を用いてさまざまな試作品を作り、耐水性・耐薬品性の試験を行っていた。

(5) パーティクルボード

パーティクルボードは、これまで木材としての利用価値のなかった端材、チップを接着剤を用いて圧着しボードとしたものであり、これまで5割にも上ると言われてい

た廃材を有効に利用するためのものである。

いくつかの試作品を見せていただいたほか、パーティクルボードの材料とするため、機材の梱包に使われていた木片をもストックしておられ、廃材は何でも利用してやろうという関係者の意欲の一端が窺えるようであった。

(6) 木質改良

木材の利用拡大、特に難処理材樹種の防腐のため、防腐剤の木材への浸透・処理条件・塗装技術の研究を行っている。

ここでも、カウンターパートの教育や、研究に熱心に取り組んでおられるスタッフの姿を目の当たりにし、また、実際にジャングル深く出かけて行って木材の伐採現場を視察された際のお話や森林破壊の原因として世論を賑わした日本の割り箸が、実は廃材の有効利用手段のひとつであるというお話を聞かせていただいたりすることができた。

5. 研修を終えて

この研修に参加するまで、ODAというものに対する私の印象は正直言って良いものであるとは言えなかった。「自然破壊」「高価な施設が使われずに放置されている」「現地の実態に合っていない」「税金のムダ遣い」等といったものである。

しかし一方で、「マスコミの言説を鵜呑みにしてはいけない」「青年海外協力隊は非常に感謝されている」という思いもあって、少しでもいいから、実際に現地へ行って活動現場を見、活動されている方々の話を聞きたいという思いを以前から持っていた。

今回その機会を得て、途上国の抱える問題の大きさとその多様性を知らずして、先進国の立場から環境問題を語ることの怖さをひしひしと感じた。

国民の生活向上・工業化を目指す途上国の多くは多額の累積債務を抱え、国家の発展と債務の返還のためにその天然資源を利用することを余儀なくされている。われわれ先進国に住む者たちは、それらの国々の安い資源、安い労働力の上に現在の生活を成り立たせているわけであり、その国の人々の生活のみならず、われわれの生活・環境を守るためにもさまざまな形での援助は欠かせないものである。

ただ、理屈では分かり切っていることと、現地で目の当たりにすることとは雲泥の差があったと言わねばならない。マレイシア一国をとっても、その民族構成の多様性とその歴史には複雑極まりないものがあり、現地事情を理解し、現地に溶け込み、技術援助・経済援助を行おうとする人々にとっては、何年にもわたる息の長い地道な努力を要求されるのだということを今さらながらに知った。マスコミによる批判が嘘だと言っているわけではない。税金のムダ遣いはできる限り減らしてほしいと思っている。

しかし、現地における援助活動が文化や生活習慣の異なる民族の中で行われ、試行錯誤の連続であることも今回痛いほど理解することができた。援助活動に関わる人々

は、その私生活の中においてもまたかれらの仕事を切り放せない。生活のすべてが援助活動であった。

かれらの活動の一端を垣間見た私もまた、批判すべきは批判するこれまでの姿勢に加えて、限られた時間・予算・人手の中で、情熱なしにはなし得ない活動を続けている人々の努力と、日本からは見えにくい途上国の現状を学び、伝えることをもしていかなくてはならないと感じた。

参考図書「熱帯雨林ってなんだ」(馬橋憲男著、築地書館発行)

第４章

平成７年度高校教師海外研修資料

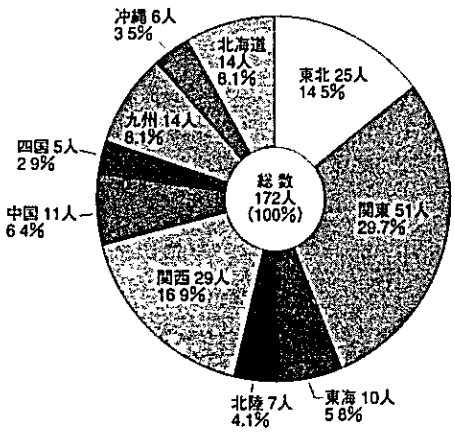
1. 募集概要

募集期間：平成7年1月15日～3月31日

応募総数：172人

協力機関：全国高等学校国際教育研究協議会

支部別応募状況



2. 事前研修とその内容

(1)支部研修

実施時期：平成7年6月～7月上旬

実施場所：国際協力事業団各国内支部・沖縄国際センター

研修内容：①開発途上国の現状と課題

②ODAとJICAについて

(2)事前研修

実施時期：平成7年7月24日～25日

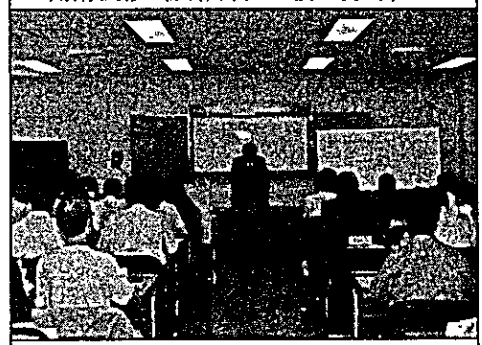
実施場所：東京国際研修センター

事前研修日程

1日目［7月24日(月)］

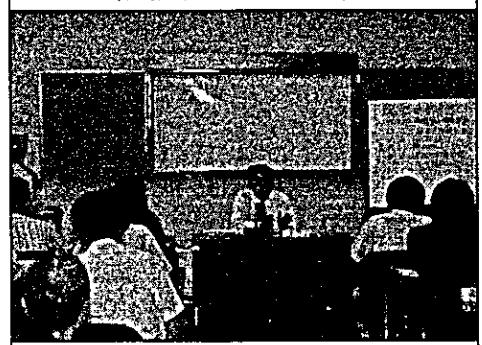
15：00～15：05

開講挨拶（広報課長　湊　芳郎）



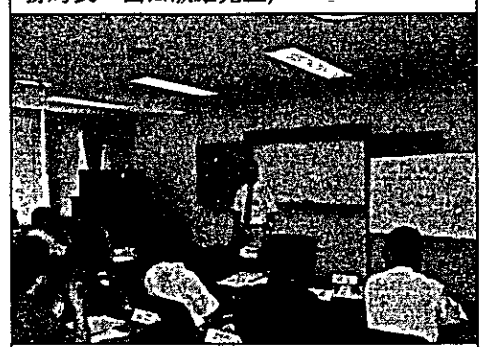
15：05～15：40

JICA事業説明と高校教師海外研修について（広報課長　湊　芳郎）



15：40～16：00

海外研修参加にあたって（全国際教事務局長　山口敏雄先生）



16：00～17：00

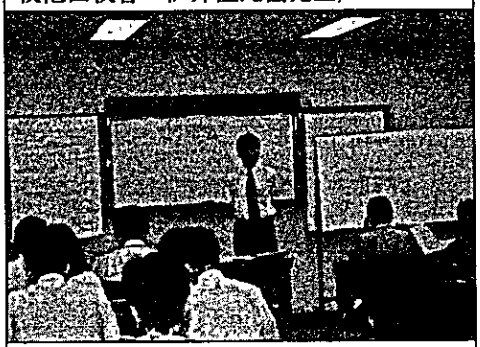
自己紹介／参加者抱負・団長選出

17：30～18：30

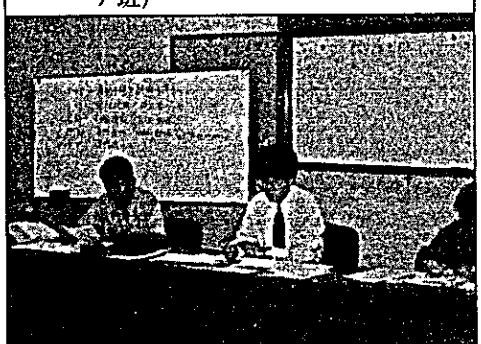
開発教育についての討論会（グループ別）

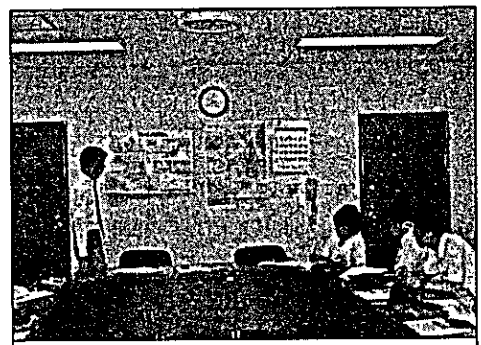
（P96参照）

2日目［7月25日(火)］
9：00～12：00
学校の授業における開発教育の方法論
(P97参照)
13：30～14：30
平成6年度の高校教師海外研修参加者による開発教育の実践事例発表（ケニア研修参加：国立大阪教育大学付属高等学校池田校舎　伊井直比呂先生）

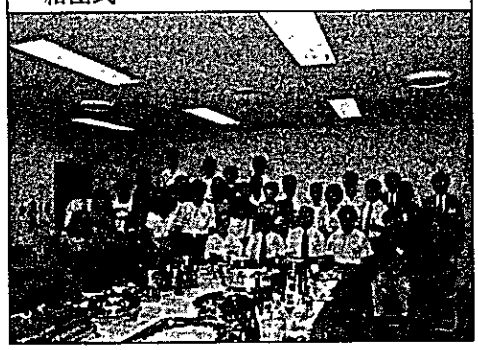


14：45～18：30
コース別研修
①渡航手続き等説明
②任国情報（写真順に、パラグァイ、エジプト・ジョルダン、マレイシア班）





18：30～20：00
結団式



(3)開発教育についての討論会

1. なぜ開発教育をするのか。

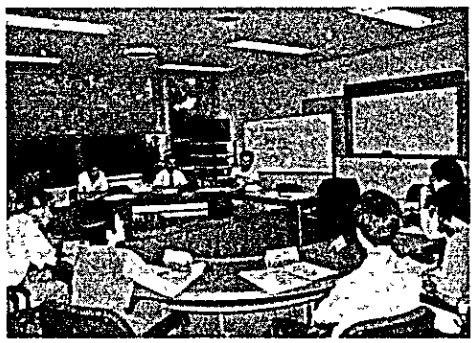
2. 何を教えなければいけないのか。

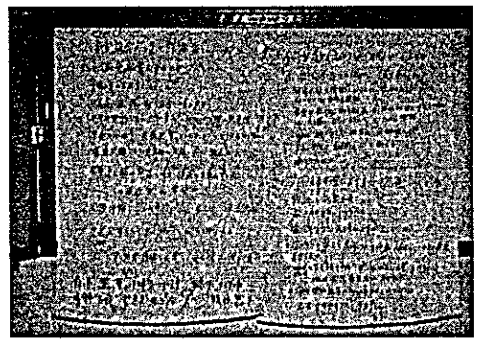
   a. 開発教育とは何か。

   b. 開発教育でないものは何か。

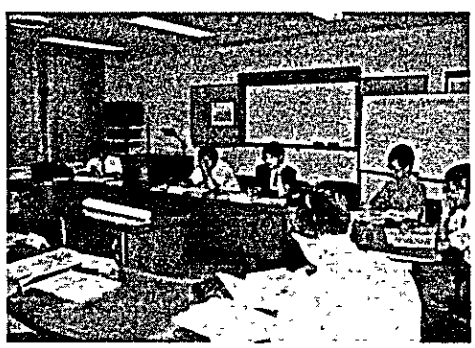
3. 今回の研修に対する抱負。

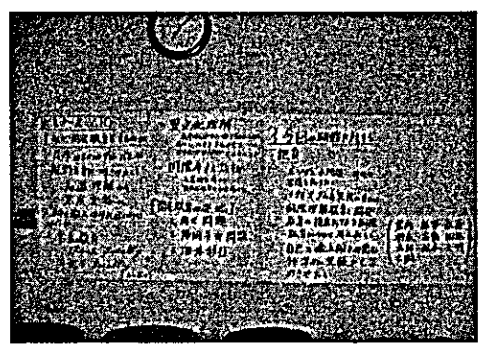
〈セミナールーム9〉
参加者：（パラグァイ班）黒澤・小杉・鈴木（敏）・宝谷 （エジプト・ジョルダン班）小辻・田中・牧口 （マレイシア班）青木・中林・宮下





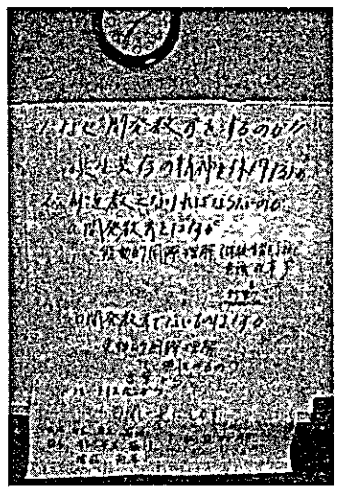
〈セミナールーム10〉
参加者：（パラグァイ班）出村・松本・矢野 （エジプト・ジョルダン班）岩内・佐藤・吉岡 （マレイシア班）雑賀・高橋・田先





〈セミナールーム11〉

参加者：（パラグァイ班）半澤・増田・南澤
（エジプト・ジョルダン班）神里・菊地・藤川
（マレイシア班）掛端・唐立・鈴木（究）・傍島



(4)「学校の授業における開発教育の方法論」の講義内容

講師：国際理解教育センター（ERIC）　角田尚子事務局長

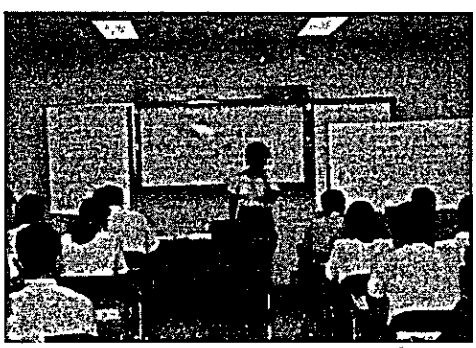
1. 自己紹介

（ねらい）お互いの知らない部分を知ることを目的とする。

（用意するもの）ペン、用紙

（所要時間）6～7分

（進行方法）各自自己紹介文を4つ書いてもらい、そのうちの1つは事実でないこと、それらしいうそを書いてもらう。なるべく短いセンテンスでまとめる（例えば、「私は東京に住んでいます」「私は……」といって書き始めると簡単）。



書き終わったら近くにいる人とお互いの文章を名刺交換のようにして交換し、その4つのうちどれが当たっていないかを推測し合う。

できるだけ多くの人とそれを繰り返す。

(まとめ) 偏見が生まれているということがわかる。私たちはどうしてもレッテルをはらずにものを見ることはできない。偏見を持っているという自分を自覚すること、それから、自分の持っている偏見が相手の不利益にならないように配慮すること、それがお互いの人権を尊重するために大事なことである。

グループの中で自己紹介をする場合、こういうアイスブレーキング的なことをちょっと工夫してやってみるのもよい。

もう一つ自己紹介の時のポイントとして、①一人が立って、みんなに「はい、自己紹介しましょう」というのは、有効な時間の使い方でない場合が多い。1回で全員の名前を覚えることはできない。②話す材料をきちんと提供すること。③自信を持つのが非常に大事。

2. フォトランゲージ

(ねらい) 写真を通して世界の家族の生活や環境などの多様性に気づき、また理解することを目的とする。

(用意するもの) 世界30カ国の家族の写真 (ERIC発行「地球家族」使用)、ペン、模造紙

(所要時間) 40～50分

(進行方法) ①2人で1枚好きな写真を選ぶ (家財道具全部を家の前に出して家族写真を撮っているもの)。

[ⓐ写真を見てその中の家族について知りたいこと、聞きたいこと等の質問を考える。
ⓑ写真を持って豊かな国と思われる順に並び、何が豊かなのか、豊かさとは何かを考える。]

②5～6人で1つのグループを作り、各グループに1枚の写真を渡す。

[ⓐその国に対してどのような援助をするかということを話し合う。その人たちにとって必要な援助とは何か。自分たちが援助をするとすれば何を援助するか。自分たちのグループで決まった援助が何かということを模造紙にまとめる。

次に、それぞれ考えた援助によって、その家族、その地域、そして、その国の50年後の姿はどうなっているかという予想図をもう一枚の模造紙にまとめ、それぞれのグループ全員によって発表する。]

(②より発表一例　エチオピア)

○エチオピア班の発表

この写真を見て一番最初に疑問に思ったのは、援助が必要じゃないのではないかという感じがしました。(中略) まずこれを見ますと、内陸かと思いますが、この人たちを見ていて、農業あるいは牧畜関係をやっているなということで、まず、農業用水が必要だと思います。子供たちもたくさんいますが、おそらくこの子供たちも水くみなどをやって大変な生活をしているのではないかと思います。まず、農業用水を確立して、農耕をできるようにしなければいけません。それから、安全な水を確保して、何とか乳児死亡率を下げるとか、あるいは平均寿命なども随分低そうなので、これを上げることも必要です。つまり、食糧増産につながるような、あるいは衛生環境の向上につながるような援助が必要ではないかというのが1点目です。

2点目は、やはり、先ほどの医療とともに、教育体制の整備が必要だと思います。おそらく識字率も50%を割っているのではないかと思います。

あとは、いくら援助しても、そこで生活している人々が自分で生きていこう、自分で何とか生活していこうという意欲を持たないことには、どのような援助をしても意味がないと思います。ですから、そういう意味で、自力更生の意欲を啓発するような援助が必要ではないかと思います。ここに「インフラの整備」とありますが、生活する上で必要なものを徐々にそろえて、自活できるような道につながるような援助が必要だということで、道路の整備、港湾建設、交通網、商業ルートの整備などを挙げました。

それで、50年後はどうなるかということでいろいろ考えたのですが、まず、一番の農業用水、安全な水の確保ということから、まず食糧が安定供給されるのではないかということです。それから、栄養状態も解決される。したがって、平均寿命も延びる。それから、自力更生の意欲の啓発ということを先ほど言いましたけれども、それにつながるような教育水準の向上。それからインフラの整備の結果、産業の発展が見込まれます。

いい点だけ挙げましたが、逆に、どういう問題があるかということで話し合いを始めたところで班の話は終わったのですけれども、環境汚染の問題、過疎化の問題も起

きるのではないかと思います。その辺を援助する場合には考えながらやらなければいけないのではないかということで終わりました。
○質問　エチオピアではどんな家に住んでいるのですか。
○回答　先ほど言いましたように、この人たちの表情を見ると、こういう家で不満だという感じが全然しないのですよね（笑声）……ですから、変に我々が考えているように家をあげるということは、かえって良くないのじゃないかと思いますがね。彼らにとってどういう家がいいのかということは、ちょっと結論は出ません。やはりよく考えなければいけない点だと思います。
○回答（補足）こちらの写真ですが、援助の必要があるか、ないかというのが、やはり私たちの引っかかるところで、それ以上論議はなかなか進まなかったのですけれども、「必要なし」という意見もあります。「難しい。必要ならば、やはり衣食住の食でしょう」と。（中略）50年後、援助があった場合、なかった場合を考えると、やはり変化が起こることは、プラスにしろマイナスにしろ、あると思います。援助がなくても、やはり周りの国とか彼ら自身の中からいろいろな変化が起こって、おそらく過疎化の道をたどるだろうと思います。

3. 開発教育を進めるために自分たちができること
（ねらい）開発教育を進めるための仲間づくり、ネットワークづくりから始め、本当に自分たちにできることを進めていくことを目的とする。
（用意するもの）ペン、名刺大の用紙、模造紙
（所要時間）20～30分
（進行方法）5～6人で1つのグループを作り、カード分析という方法で進める。開発教育を進めるために、①自分自身にできること、②仲間でできること、③社会として取り組めばいいと思うこと、この3つの観点で1枚の紙に1つのアイデアを書き込む。書き終わったら、自分の書いたものをそのまま全部、円になっている右隣の人に渡す。渡されたら全部読み、回していく。どんどん回していき、自分の手元にこれはいいなと思うアイデアを3枚選ぶ（自分のカードは選ばない）。何回も回っているものは横にはじく。
　次に、グループの中でお互いに自分の取ったベストスリーを出し合って、グループでベストスリーを選び、それぞれのグループから、ベストアイデアを発表する（ほかのグループが発表したものは繰り返すことができない。3つ持っている中で、1つずつしか言えない）。（P98左下写真参照）
（まとめ）自分のものを自分が発表すると、どうしてもその意見に凝り固まってしまうというところがあるが、カード分析というのは、他の人の意見から、いいものを自分の手元に置いて、それを皆にシェアしていくという形をとるので、自分のアイデアに固執

せずに客観的に考えることができるという利点がある。自分たちのものを発表するときに、前の人のアイデアは繰り返してはいけないということで、積極的に意見が出る。

自分たちに何ができるのだろうかということをまず考える。その情報を共有して、自分たちの仲間で話し合う。

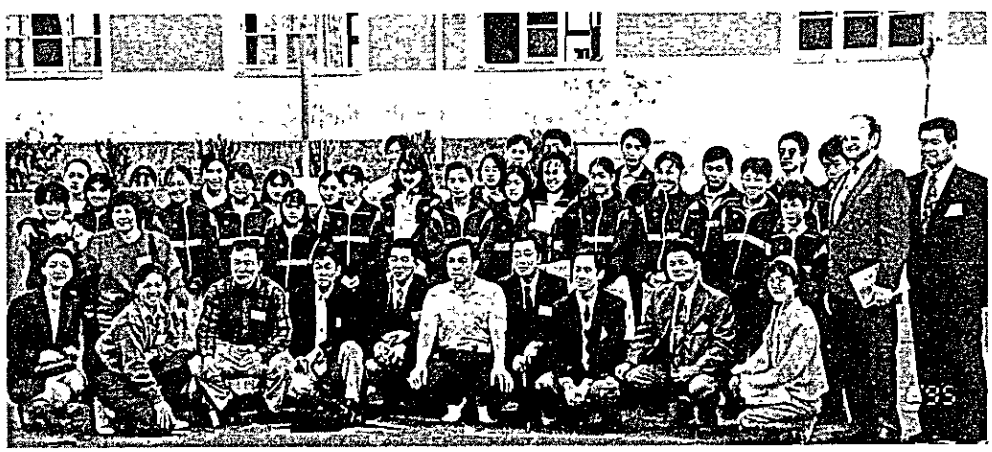
開発教育を進めるための仲間づくり、ネットワークづくりから始め、思いを共有できる人と一つでも二つでもやれることを進めていく。

3. コース別日程／参加者氏名

〈パラグァイ班〉

月日(曜)	午　前	午　後
7.26(水)	19:00 成田発	
7.27(木)	10:50 アスンシオン着	15:30 大使館表敬訪問 16:40 JICA事務所訪問 19:30 所長主催夕食会
7.28(金)	9:00 現地高校視察（三育学園）	14.00 現地高校視察（国立工業高校）（電気機器、工作機械協力隊員活動現場） 16:30 LACIMET（熱帯感染症中央病院）視察 17:45 人造りセンター視察
7.29(土)	10·00 青果物流通改善計画プロジェクト視察（ABASTO市場）	15:30 アスンシオン市内視察 21:00 民族舞踊見学（夕食）
7.30(日)	11:00 ホテル発	17:50 エンカルナシオン着
7.31(月)	8:15 エンカルナシオン支所訪問 9:40 協力隊活動現場視察（サン・ブラス中高校） オブリガード・ドイツ人移住地視察	13:15 ピラポ日本人会（ピラポ日系人移住地視察） 14:15 ピラポ農協施設視察 16:15 地域農業研究センター（CRIA）現場視察 19:30 日系移住者団体との懇親会
8.1 (火)	8:00 ホテル発 9:00 トリニダ（イエズス会）遺跡視察	13:30 エステ市着 15:00 イタイプ・ダム視察 16:50 エステ市内視察 19:00 協力隊および専門家との懇親会
8.2 (水)	8:30 CETAPAR視察 10:00 イグアス日本語学校授業参観および懇談 11:10 イグアス日本人会 11:50 イグアス診療所施設視察	14:00 イグアス農協視察 15:00 深見農場視察（農家、畑地、酪農視察） 16:00 倉兼牧場視察 16:40 EL SOL社（乳製品工場）視察
8.3 (木)	9:30 イグアスの滝視察 12:00 イグアスの滝発	14:00 イグアス・フォール空港着 17:00 サンパウロ着
8.4 (金)	0:10 サンパウロ発	
8.5 (土)		13:10 成田着

氏　名	所属学校名 所在地	担当教科
鈴木敏彦	福島県立東白川農商高等学校 〒979-61　福島県東白川郡棚倉町字東中居63	商　業
南澤英夫	青森県立川内高等学校 〒039-52　青森県下北郡川内町家の上48	社　会
小杉美砂子	静岡県立横須賀高等学校 〒437-13　静岡県小笠郡大須賀町横須賀1491-1	英　語
黒澤　進	神奈川県立希望ケ丘高等学校 〒241　神奈川県横浜市旭区南希望が丘79-1	英　語
半澤典子	栃木県立宇都宮清陵高等学校 〒321-32　栃木県宇都宮市竹下町908-3	社　会
出村久仁男	福井県立高志高等学校 〒910　福井県福井市御幸2-25-8	社　会
矢野佳津	奈良県立高円高等学校 〒630　奈良県奈良市白毫寺町633	国　語
宝谷亮介	兵庫県立姫路東高等学校 〒670　兵庫県姫路市本町68-70	社　会
松本　寛	佐賀県立唐津農業高等学校 〒847　佐賀県唐津市神田字堤2629-1	農　業
増田禎朗	鹿児島県立入来商業高等学校 〒895-14　鹿児島県薩摩郡入来町副田5961	社　会



サン・ブラス中高校で日系移住者子弟と一緒に

〈エジプト・ジョルダン班〉

月日(曜)	午　前	午　後
7.26(水)	11:00 成田発	16:35 ロンドン発 23:30 カイロ着
7.27(木)	9:30 教育省文部次官表敬 10:30 高校視察 Gamal Abdel-Naser 一般女子校 12:00 高校視察 Yousef Al-Sebaai 一般男子校	14:30 カイロ大学園芸バイオテクノロジー視察 19:00 専門家等との懇親会
7.28(金)	終日、遺跡・史跡視察（メンフィス、サッカーラ、ギザ、博物館等）	
7.29(土)	午前 マリオット水産養殖・研究所視察（アレキサンドリア市）	午後 農業機械化研究所 米作機械化センター・プロジェクト視察
7.30(日)	9:30 カイロ大学新小児病院プロジェクト視察	午後 カイロ大学看護学部プロジェクト視察 JICA事務所訪問 19:00 カイロ発 20:35 アンマン（ジョルダン）着
7.31(月)	9:30 JICA事務所訪問 11:30 シニアー協力専門家活動視察（ボーイズ・ホーム）	12:30 パレスチナ難民キャンプ・ワハダット視察 15:30 史跡視察(考古学博物館、ローマ遺跡)
8.1 (火)	9:30 専門家協力現場視察（UNRWAワディシール職業訓練センター） 11:30 パレスチナ難民キャンプ・バカ視察	午後 ローマ遺跡視察（ジェラシ）
8.2 (水)	午前 アリア女王基金保育園視察 モーゼ終焉、ネボ山、博物館視察	午後 死海視察
8.3 (木)	午前 ハヤ女王カルチュラル・センター視察	午後 YMWA身体障害者木工技術訓練センター視察（供与機材現場） 19:00 専門家等との懇親会
8.4 (金)	10:45 ホテル発	13:15 アンマン発
8.5 (土)	8:45 カイロ発	13:25 ロンドン発
8.6 (日)	9:10 成田着	

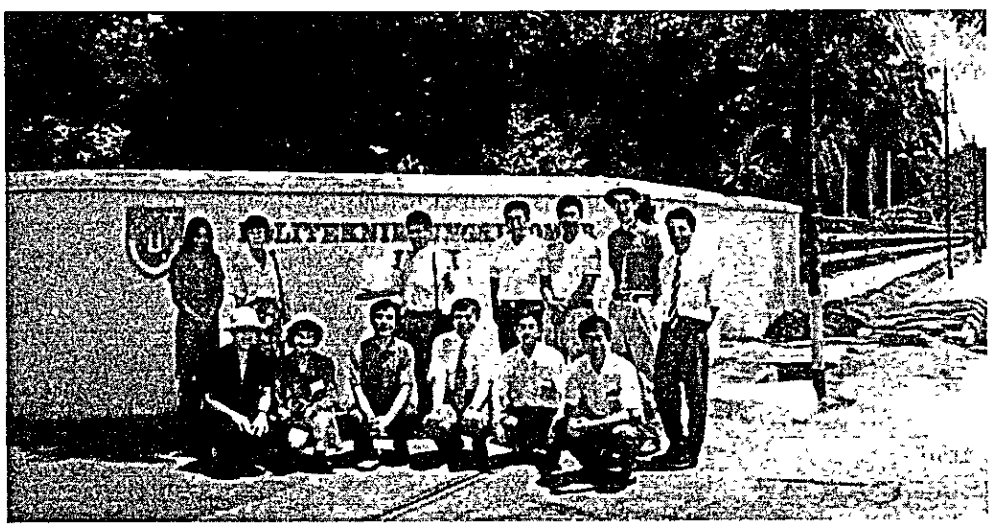
氏　名	所属学校名 所在地	担当教科
藤川　実	北海道釧路湖陵高等学校 〒085　北海道釧路市緑ケ岡3-1-31	英　語
佐藤淳子	宮城県石巻女子高等学校 〒986　宮城県石巻市貞山3-4-1	英　語
小辻俊雄	東京都立農産高等学校 〒124　東京都葛飾区西亀有1-28-1	社　会
牧口　薫	神奈川県立商工高等学校 〒240　神奈川県保土ケ谷区今井町743	情報処理
岩内健二	名古屋市立桜台高等学校 〒457　愛知県名古屋市南区霞町21	国　語
吉岡雅樹	徳島県立貞光工業高等学校 〒779-41　徳島県美馬郡貞光町字馬出63-2	英　語
菊地國雄	福岡女学院高等学校 〒816　福岡県福岡市南区日佐3-42-1	国　語
田中文博	聖和女子学院高等学校 〒857　長崎県佐世保市松山町495	社　会
神里涼子	沖縄県立久米島高等学校 〒901-31　沖縄県島尻郡具志川村字嘉手苅727	英　語

YMWA身体障害者木工技術訓練センターにて

〈マレイシア班〉

月日(曜)	午　前	午　後
7.26(水)	10:30 成田発	16:25 クアラルンプール着 19.00 事務所主催懇親会
7.27(木)	9:15 JICA事務所訪問 12.00 SIRIMプロジェクト視察	16:00 ブルーモスク視察 18:30 クアラルンプール市内
7.28(金)	10:30 ポリテク高専視察（協力隊員）	14:00 イポー・クアラカンサー観光
7.29(土)	9:40 複層林（MSFMP）ビドール事務所訪問 10:30 チクス・サイト視察	12:30 ビドール 14:30 MSFMPビドール事務所 15:00 クアラルンプール
7.30(日)	10.00 ローヤル・セランゴール、セントラルマーケット視察	17:00 スパン空港発 18:40 クチン着
7.31(月)	10:00 サラワク救急医療プロジェクト視察	13:30 博物館見学（Sarawak Museum）
8.1 (火)	10:00 サラワク木材利用プロジェクト視察	13:30 セメンゴ 14:10 野生動物リハビリセンター視察 18:30 専門家との懇親会
8.2 (水)	10:00 作業療法士協力隊員訪問	14:00 文化村見学
8.3 (木)	5:40 クチン発 9:20 クアラルンプール発	17:00 成田着

氏　名	所属学校名 所在地	担当教科
鈴木　究	北海道立羅臼高等学校 〒086-18　北海道目梨郡羅臼町礼文町9-3	社　会
掛端不似子	八戸聖ウルスラ学院高等学校 〒039-11　青森県八戸市田面木上野平53-2	家庭科
髙橋壯治	岩手県立釜石工業高等学校 〒026　岩手県釜石市大平町3-2-1	工　業
宮下理人	長野県立木曽山林高等学校 〒397　長野県木曽郡木曽福島町新開4236	農　業
青木孝夫	埼玉県立杉戸農業高等学校 〒345　埼玉県北葛飾郡杉戸町堤根1684-1	社　会
傍島剛司	岐阜県立大垣東高等学校 〒503　岐阜県大垣市美和町1784	社　会
中林千景	兵庫県立芦屋南高等学校 〒659　兵庫県芦屋市新浜町1-2	理　科
田先崇志	兵庫県立社高等学校 〒673-14　兵庫県加東郡社町木梨1356-1	理　科
雑賀明子	大阪府立玉川高等学校 〒578　大阪府東大阪市稲葉2-3-25	英　語
唐立慎二	広島県立三次工業高等学校 〒729-62　広島県三次市大田幸町656	工　業



ポリテク高専。高林協力隊員を囲んで

4. 開発教育参考資料

開発教育や開発問題について、もっと詳しく知りたい方々のために、開発教育を実施している団体や、教材として役立ちそうな教材／素材をリストアップしてみました。国際協力事業団（JICA）刊行のものは、各支部にお問い合わせください。

(1) 開発教育関係NGO・団体

機関名	所在地	活動*
国際理解教育センター (ERIC)	〒114 東京都北区東田端1-14-1岩瀬ビル TEL03(3800)9414 FAX03(3800)9416	①～⑤ ⑥施設利用、カリキュラム開発等
開発教育協議会	〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-18-76 TEL03(3207)8085 FAX03(3207)8486	①～③、⑤、 ⑥開発教育情報センター開館
財団法人 国際協力推進協会 (APIC)	〒106 東京都港区南麻布5-2-32 第32興和ビル TEL03(5423)0571 FAX03(5423)0576	①～③、 ⑥国際協力プラザ開館
社団法人 協力隊を育てる会	〒160 東京都新宿区霞ヶ丘町15 日本青年館内 TEL03(3402)2153 FAX03(3402)3263	①～③、⑤、 ⑥小さなハートプロジェクト

(2) 国際協力NGO団体の開発教育

機関名	所在地	活動*
NGO活動推進センター (JANIC)	〒101 東京都千代田区神田錦町2-9-1 斎藤ビル5階 TEL03(3294)5370 FAX03(3294)5398	①～③、⑤、 ⑥NGO活動推進センター資料室開館
シャプラニール＝市民による海外協力の会	〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園スコットホール内 TEL03(3202)7863 FAX03(3202)4593	①～⑤、 ⑥作文・小論文コンクール、バングラデシュ製品輸入販売
曹洞宗国際ボランティア会 (SVA)	〒170 東京都豊島区巣鴨1-28-5 ヒカリビル202号 TEL03(3945)0981 FAX03(3942)7900	①～⑤、 ⑥図書館開館
財団法人 日本ユニセフ協会 (ユニセフ日本委員会)	〒160 東京都新宿区大京町31-10 第一大京ビル TEL03(3355)3221 FAX03(3355)3810	①～③、 ⑥図書館開館
社団法人 日本ユネスコ協会連盟 (日ユ協連)	〒163 東京都新宿区西新宿1-25-1 新宿センタービル38階 TEL03(3340)3921 FAX03(3340)3928	①～⑤、 ⑥ユネスコ広報センター開館

*①セミナー開催②講師の派遣③資料の収集・開発・提供④スタディツアー⑤機関誌の刊行⑥その他

(3) 開発教育教材／素材

分類	タイトル	内　容	問い合わせ先	備考
本・冊子・パンフレット	開発教育ダイレクトリー'94	日本の開発教育を進める団体の活動を紹介した冊子	開発教育協議会 TEL03(3207)8085	有料
	開発教育ハンドブック	各種開発教育実践例を紹介した冊子		
	開発教育教材カタログ '95	開発教育に役立つ本や映像、ゲームなどを紹介した教材カタログ		
	ワールドスタディーズ ～学び方･教え方ハンドブック	国際理解教育のさまざまな事例を説明した本	ERIC TEL03(3800)9414	有料
	フードファーストカリキュラム ～食べ物を通して世界を見つめよう	身の回りの「食」を通して世界とのつながりを説明した本		
	新しい開発教育のすすめ方	テーマごとに模擬授業を行い、各分科会で授業案を作成し成果をまとめた、教師や社会教育現場で新しい開発教育に取り組む指導者のための参考資料	古今書院　発行 TEL03(3291)2757	有料
	開発教育実践の手引き	開発教育の実践例を掲載した冊子	APIC TEL03(5423)0571	有料
	国際理解教育展開事例集	国際交流・帰国子女教育・科目別国際理解教育の事例を紹介した本	一橋出版　発行 TEL03(3392)6021	有料
	南北問題と開発教育	南北問題とは何か、開発教育とは何かを解説した本	田中治彦　著 亜紀書房　発行 TEL03(5280)0261	有料
	地球と語りたい	平成6年度高校教師海外研修参加者教師による、開発教育実践のための事例集	JICA広報課 TEL03(3346)5029	無料
	いま私たちにできること	中学生・高校生を対象に国際協力、開発教育について考えてもらうことを中心にまとめた副読本		

「地球と語りたい」

「いま私たちにできること」

分類	タイトル	内　容	問い合わせ先	備考
ビデオ・スライド	地球の仲間たち（Part I, II）	途上国の人々と日本の人々の暮らしを「服装」「食べる」「子供たちの生活」等の面から紹介したスライド	開発教育を考える会 TEL0462(55)1867	貸出 無料
	開発教育キット （Part 1～4）	途上国の児童画スライド （Part 1） 「動くアジア」スライド （Part 2） 「アジアのうねり」ビデオ （Part 3） 「アフリカ大好き」ビデオ （Part 4） スライド・ビデオと教師用シナリオがセットになった開発教育用の教材	APIC TEL03(5423)0571	貸出 無料
	開発途上国ってどんな国？ ～小さな友情から大きな夢へ～	日本人の少年が途上国を訪れ、現地の生活の困難さを目の当たりにし、途上国を認識していくアニメーションビデオ	外務省 TEL03(3580)3311	貸出 無料
	約束 ～アフリカの水と緑～	日本人の少年とアフリカの遊牧民の子供との友情を描くアニメーションビデオ	JICA各国内支部 （p.111参照）	貸出 無料
	地球の明日を見つめて ～JICAは今～	エジプト、バングラデシュ、パラグァイの援助を通じて、技術協力の意義、役割を紹介		貸出 無料
定期刊行物	国際協力	途上国の現状やJICA事業に関するさまざまな情報を取り扱ったJICAの広報誌（月刊）	JICA広報課 （p.111参照）	有料 ¥500
	クロスロード	「顔の見える援助」の最前線で活躍している青年海外協力隊員の生の声を伝える雑誌（月刊）	JICA青年海外協力隊事務局 TEL03(3400)7261	有料 ¥310
	国際開発ジャーナル	ODAと国際協力の系統的情報を網羅するわが国唯一の専門月刊誌（月刊）	国際開発ジャーナル社 TEL03(3584)2191	有料 ¥850
	国際協力プラザ	国内外の国際協力に関わる情報を、一般市民向けにわかりやすく掲載している情報誌（月刊）	APIC TEL03(5423)0571	有料 ¥500

(4) JICA各支部問い合わせ先

本部

〒163-04 東京都新宿区西新宿2-1-1　新宿三井ビル46階
総務部広報課
TEL 03(3346)5029　FAX 03(3346)5032

北海道国際センター（札幌）
〒003 北海道札幌市白石区本通16丁目南4-25
TEL 011(866)8383(代)
FAX 011(866)8382

北海道国際センター（帯広）
〒080-24 北海道帯広市西20条南6-1-2
TEL 0155(35)2001(代)
FAX 0155(36)2582

東北支部
〒980 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1
仙台第一生命タワービル15階
TEL 022(223)5151(代)
FAX 022(227)3090

関東支部
〒336 埼玉県浦和市北浦和4-5-5
北浦和大栄ビル7階
TEL 048(834)7770(代)
FAX 048(834)7775

東海支部
〒460 愛知県名古屋市中区丸の内2-4-7
愛知県産業貿易館西館8階
TEL 052(221)7103(代)
FAX 052(201)9516

北陸支部
〒920 石川県金沢市広岡3-1-1
金沢パークビル9階
TEL 0762(33)5931(代)
FAX 0762(33)5959

関西支部
〒530 大阪府大阪市北区堂島2-2-2
近鉄堂島ビル14階
TEL 06(345)3621(代)
FAX 06(345)3616

中国支部
〒730 広島県広島市中区紙屋町1-2-29
安田火災・富士銀行広島共同ビル8階
TEL 082(247)2851(代)
FAX 082(504)0888

四国支部
〒760 香川県高松市亀井町5-1
百十四ビル13階
TEL 0878(33)0901(代)
FAX 0878(37)0747

九州支部
〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前2-9-28
福岡商工会議所ビル8階
TEL 092(451)3380(代)
FAX 092(474)1665

沖縄国際センター
〒901-21 沖縄県浦添市字前田1143-1
TEL 098(876)6000(代)
FAX 098(876)6014

編集後記

今回の高校教師海外研修では、多くのことを書き留めることができた。その中に「木を植えて森を育てるという考えが、元々ないところでの森林育成は、大変むずかしく失敗が多い。しかし、このプロジェクトにはやりがいを感じる」という専門家の言葉がある。この開発教育という新しいものへの試行錯誤と重なって、このさりげない言葉が心に残った。

我々は、一人一人が開発教育の必要性を知り、教科を超えてチャレンジしてみた。「地球と共に生きる」というタイトルには、途上国におけるグローバルな問題解決には“共生という立場が大事”であるという願いが込められている。どれだけ先入観や固定観念を取り除き共生という立場で途上国の現状を伝えることができたか、十分でないかもしれないが新しい分野での授業には、苦労を超えた充実感があった。このレポートがせめて全体としてこれからの開発教育実践へのステップとなれば、幸いである。

最後に、途上国で国際協力に携わる方々のご活躍を願いつつ、編集後記としたい。 (T. A.)

地球と共に生きる
平成7年度 高校教師海外研修 ～開発教育への視点～

平成8年2月発行
発行者 国際協力事業団
〒163-04
東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル内私書箱216号
電話 03-3346-5029

©1996 国際協力事業団 Printed in Japan
この冊子は再生紙を使用しています。

JICA

LIB